
しのぶちゃんと私

灰谷爽治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しのぶちゃんと私

【Nコード】

N8726G

【作者名】

灰谷爽治

【あらすじ】

アイツは誰もが振り返るイイオトコ。正直言って、苦手なタイプ。なのに何故だか気に入られ……！？女子高生とカフェのマスターの、年の差ラブコメです。

LESSON 1. 最初のひとくち（前書き）

女子高生とタラシのカフェ店長のお話、はじまりはじまり。
まずは女子高生ちゃん視点です。

LESSON 1. 最初のひとくち

「どうあゝゝゝ雨あめアメ！」

頭をカバンで覆いながら、馴染みのカフェ『SILENT』の扉を押す。

『CLOSED』になってんのなんかおかまいなしだ。
窓からしのぶちゃんが煙管吸ってんのが見えたもん。

「お客さあん……まだやってないんスけど」

無造作に煙管の火を消しながら、気怠く言うしのぶちゃんはこここのマスター。

先週やっと教えてもらったんだけど、フルネームは『黒沢史惟^{クロサワシノブ}』。
御歳28歳。

お札に私の名前と歳（矢井田ヒナコ 17歳）を教えてあげたら、
「ああ？そんな名前の歌手いなかったか？ダーリンダーリ〜ン♪てやつしか知らねえけど」だって。

古いよ、しのぶちゃん。

「わあかつてるよ！

ちよっと雨宿りしたいだけ」

「アマヤドリだあ？」

嘘こけ、どーせそのうち何か出せとか言い出すだろが」

「あによ？」

客に何も出さないカフェがどこにあるわけ？」

「オーダーしない、金払わない、じゃ客じゃねえな」

「うるさいっ

大体金欠のジョシコーサーから金取ろうなんて方が悪いのよっ」

「ケツ、口の減らねえガキ」

言いながら奥に入ったしのぶちゃん。

戻ってきたときには手に白いバスタオル。

ほらよ、と投げ付けられたものは顔に直撃したが、ずぶ濡れの今はありがたい。

「どーもアリガトウ

いつものやつチョコーダイ」

「……ああ？」

「もお、ホットチョコレートを生クリームのせくださいっ」

「メニューにねえんすけど」

「……………」

「へいへい

只今お作りイタシマス、ってな」

おっもしれえな、お前、と笑うしのぶちゃんに向けて、イヤミに引き攣った満面の笑み。

ささやかな仕返しとばかりに、私はスツールに腰掛ける。

カウンターの向こう、皮肉っぽく口角を上げるしのぶちゃんの真向かいに。

ぼさぼさの髪とブショウ髭は綺麗な銀色。

浅黒い肌に、冷たそうな、シベリアンハスキーみたいなアイズブルーの瞳。

もちっとオシャレにしたらすごいカッコイイのに、「んなことしたら言い寄る奴が余計増えるだろうが。第一めんどくせえ」だと。

実際その会話の直前、しのぶちゃんは長々とケータイで女の人と喋ってた。

あの感じからすると、別れ話がこじれてたみたいで。

そりゃあそうでしょうとも、あなたは大層おモテになるでしょうよ、と返したら、鼻で笑って、「何お前、妬いてんの？」だって。

危うくマグカップを粉々に握り潰してしまうところだった。

くそう、くそう。

この女ったらしめ。

女性の敵め！

腹が立つからこうしてたかってやるのだ。

「ほいよ

ビターホットチョコ、クリーム添えな」

「あい、どーも」

でも不思議なことに、なんだかんだ言いながらも、しのぶちゃんはいつも私の相手をしてくれる。

こうしてあったかいものやケーキ出してくれたり（勿論タダ）、話し相手になってくれたり。

「んー！ んまいっ！！
やあっぱしのぶちゃん天才だわー♪」

「へっ……そりゃどーも」

濃厚で香りの立ったビターチョコとホイップクリームのバランスは
絶妙。

ものすごく美味しいものは口に入れた瞬間から美味だということを、
しのぶちゃんの作るものを口にしてから知った。

私の賛美の台詞にテキトーに返事しながらも、しのぶちゃんの唇は
素直に弧を描いている。

灰皿を引き寄せ、また煙管。
でも私の方に煙が行かないよう、さりげなく空調の風向きを変えて
くれている。

まったく、意地悪なのか優しいのか。
ただ言えるのは、しのぶちゃんはオトナのひと、ってことだけ。

うちのクラスにもいるだろな、こういう奴の餌食に『進んで』なっ
ちゃう子、なんて無責任なことを考えながら、ホットチョコをもう
一口。

「……………んで？」

今日はいつまで居座るつもりよ？」

「居座るなんて失礼な

コレ飲んで、雨おさまったら帰りますっ」

「ん……………そ、か」

「……………何、なんかモノ言いたげに見えんですけど」

唇に張り付いたクリームの膜を舐め取りながら聞いてみる。

しのぶちゃんは思案しているような表情のまま深く紫煙を吸い込み、天井を向いて、深呼吸のようにそれを吐き出す。

そして灰皿に煙管を押し付け。

「お前さあ……………」

俺が女の話とかしたら怒る？」

「はっ？」

え、何、好きな人でもできたとかって話!？」

思わずカップを取り落としそうになる。

「好き………なあ………」

ああー………ま、そうなる、かなー………」

「？ 煮え切らないねえ

気になるんならもう好きの始まりなんじゃないの？」

「気になる、ねえ………」

ま、なるな………うん、気になる」

「あーも、意味わかんない

で、何の話がしたいわけよ!？」

「ああ？

んあー………簡単に言うとな

最近、俺んとこにやたらと入り浸る奴がいるわけだ」

「で、その子のことが気になるわけね？

可愛い子？ ビジン？」

「まあ………な

可愛い、つつうか、若いな」

「若い子かあ………」

ここはやはりオトナの魅力でアタックですね、うん」

「アタック………どうすんだ、それ」

「どうすんだ、って………ほら、こないだケータイで話してた女の人

とかの時みたいになあ」

「は！？ 俺何もしてねーぞ」

「あーハイハイわかったわかった

俺サマは口説いたりしなくても女の方から寄ってくるんでしょ？
今そんなカッコつけなくていいから」

「いや、そーじゃなくて

……本当にねーんだよ、自分からどーのこーのしたことなんか
見当もつかん……どうしたらいいんだ？」

コイツ、まだ言うか。

こんなときでもイイ男オーラを振り撒くしのぶちゃんにイラツとする。

本気で困惑した顔で尋ねてくるから、余計に。

大体、何で私が10も年上の男の恋愛相談に乗らなきゃならんのだ。

「へ……っ

とりあえず、何でもしてみりゃいーんじゃないデスカー？」

「一応、店のモンおごってやったりはしてるけど……」

「……あのね、私にしてのと同じ扱いで振り向くわけないじゃん！

オトしたいなら、なんての？

こう……もつとき、情熱的な、ほら！

口説きに口説くとか、プレゼント攻撃とか、デートに連れ回して最後に自慢のテクニクでモノにするとか」

「自慢のテクニク……何、お前そんなこと考えてんの？

バカなんぞ、若いうちからんなことばっかに興味持ったりしてた
ら」

「ば……っ、私じゃないよ！

クラスの子とかがそういう話してただけで」

「セックスしましたーラブホ行きましたーだなんだで、大人ぶって
盛り上がってんだろ？

くっだらねー」

「よく言うよ、しのぶちゃんだってセフレ何人もいる癖に」

「はぁ！？」

「気が付いてないかもしれないけどね、しのぶちゃんいつも香水
くさいよ

趣味の悪い、やったら甘ったるいやつ

しかも毎回違う匂い

こないだなんか口紅付いてたし

……奥で誰か寝てたよね、あの日」

私の言葉に、しのぶちゃんはいささか苦々しい顔をする。

基本的に、しのぶちゃんは色々とだらしなくて、面倒くさがりな男だ。

恐らく下半身の事情についても、だらしなくて面倒くさがりなはずで。

「相手がどんな子か知らないけどさ、ティーンのお嬢さんとお近づくことになるなら、そのへんもーちっと上手くごまかした方がいんじゃない？」

「…………もう誰もいねーよ

そういう付き合いしてる奴らとは、みんな切れた」

「うっそ!!? 本命さんの為？」

「さあな

わかんねえけど、興味が失せた」

「なあんだ! やっぱしのぶちゃんその人のこと好きなんだよ、きつと!

晴れて身奇麗になった事だし、モーションかけろかけろ!

テゴメだ、テゴメ!!」

あれだけ何人もいた「オトモダチ」と精算したってあたりに、私は

しのぶちゃんの気持ちが見えたように思える。

こりゃあヤツは本気だな。

さてさて、どうなることやら。

それにしても、惚れられた子は可哀相に。
こんな、いかにも色々苦労しそうな男に。

「テゴメ……」

ネンネちゃんだろ、絶対………」

「いーじゃん、そんな時はイチから『女の悦び』を教えてあげるんだよ
得意じゃん、そういうの」

「ふ、ん………そうか……」

考えこむように俯くしのぶちゃん。

わあー。

わあー面白いコトになってきたー！

「ま、とにかく頑張ってみなよ
しのぶちゃん顔キレイだしガタイいいし、ヒゲ剃って着替えて、せ

いぜい『一途な愛』ってやつをアピールしなよ
堕ちない子なんてまずいないでしょ」

励ますためとはいえ多少褒めすぎたが、まあいい。

込み上げる不謹慎な笑いを噛み殺し、私はぬるくなったホットチョコを飲み干す。

「ふぁー、美味しかった！」

雨も小降りになってきたし、私行くわ」

「待てよ

今ヒゲ剃って着替えてくるから」

私の返答も聞かず、しのぶちゃんはいそいそと奥に引っ込む。

「だから……私に見せてどうすんのよ

麗しいお姿は好きな子のためにとっとけばー？

あー、聞いてないし」

カウンターの奥、電動ヒゲ剃りがじりじりいうのが響いてくる。
しばらくするとそれは、ごそごそという小さな音に変わる。

わ、着替えてる？

あーも、私に見せてどーすんだか。

呆れているうちに、こつこつと足音が近付いてきて。

「う、あ……………！」

「どうだ、こんなもんか？」

しまった。

バカやった。

見なきゃよかったよ。

かきあげられたボツサボサの前髪の下から現れたのは、思ってたよりずっと端正な顔。

いつも着てるのはだぼだぼのシャツだったからわからなかったけど、骨太な身体にはきっちり鍛え上げられた筋肉が乗っかっている。

こりゃ何もしなくても寄ってくるわ、女。

「い…………いいんじゃないんスか？」

うあ、やだどうしよう。

すんごいドキドキする……………！

「どんな奴でも……………堕ちると思う？」

言いながらしのぶちゃんは私の正面に歩み寄る。カウンターに肘をつき、見惚れて固まっている私の顔を覗き込む。

「う…………あうう……………」

おちつけおちつけおちつけコイツはヤリ○ンコイツはヤリ○ンコイツはヤリ○ン……………」

「…………ハハッ、顔真っ赤

ほら、帰るなら早くしろよ

次来たとき返してくれりゃいいから、そこにある傘持ってけ」

至近距離で見つめられてぼうっとしている私に、しのぶちゃんは悪戯っぽい笑みを寄越す。

ハッ和我に返ったはいいが、上手い返答が見つからない私。

ヤバイヤバイヤバイ!!!

逃げるようにスツールを降りてカバンを引っ掛ける。

「あ、待てよ」

カウンターから出て来たしのぶちゃんが、入口に向かう私の前に回り込む。

「クリーム付いてる」

ぎょっとして口元を拭う。

箸が。

ーど、さっ

「……………んんう、っ」

カバンがずり落ちたのに、押さえ付けられてるせいで拾えない。

視界は、さっきよりもっとどアップの、しのぶちゃんの顔で一杯。

さらさら顔に降りかかる銀髪。

浅黒く滑らかなまぶたを飾る、長い睫毛。

後頭部の髪の毛を下に引っ張られるせいで、自然と顎が上向く。

私の唇を挟み込むように乗っかっているのは、なんだかふあふあやーらかい、ちよっぴり煙管くさいもの。

ーしのぶちゃんの、唇

わああああああっ！！

私のっ、あたしの大事な初キッスがあああああああっ！！！！

「……ネンネちゃんにはイチから女の悦びを教えてやったらいいんだよな？」

シヨックすぎてまた硬直している私に、しのぶちゃんは実にキケンな微笑みを作って見せる。

「俺の気になる奴な、毎っ回無銭飲食しやがんの
しかもメニユーにないもんばっか出せって

今日もな、雨宿りさせろって、準備中なのに入ってきて、ホットチ
ョコ飲ませろ、だと」

「……………」

「それがさあ、毎度毎度美味そうに食うの
『しのぶちゃん天才♪』なんて、俺の作ったもん幸せそうに頼張
るわけ

はは……っ、10も年上の俺に向かって『しのぶちゃん』だぜ？
俺のこと『ちゃん』付けする奴なんか他にいねえぞ？ ヒナ」

「あ……たし？」

「ご希望通り、テゴメにさせてもらおうわ
よ・ろ・し・く」

逃げんなよ、と、アイスブルーが光り。

「嘘……………」

煙管くさくて気持ちいいものが、降ってきた。

こうして、私の甘すぎる不幸は始まった。

LESSON 2. 危険なキッス、息継ぎにご注意（前書き）

テゴメ宣言をされてしまったヒナコ。

その心境は？

ヒナコ視点です。

LESSON 2. 危険なキッス、息継ぎにご注意

ふんあり柔らかかなものが唇を塞ぐ。
ぷんと鼻を突く男物の香水の匂い。
それに混じった、野生的な何か。

「……ふっ、息止めんなって」

「ん…っ、バカ、むり…っん」

しのぶちゃんは楽しげに笑って私の唇をついばむ。
緊張と混乱で閉じたまま固まったそこを、何度も角度を変えてほぐすように。

まるで好物をじっくり味わっているときみたいに上機嫌に見えるのは、気のせいなんかじゃないはずだ。

有無を言わせぬ力で掴まれ、上向かされる顎。
太くて長い腕に閉じ込めるように拘束される。目の前にある大きな身体に包まれる。

あまりにも無力な状況なのに、心を占めるはずの恐怖はどこにもない。

あるのは未知の浮遊感。

何て言うか、昂揚、みたいな。

けれどもどこか安堵にも似ているようで。

あ、もうだめ、脚が……

「うお……つと、もう腰にきたか？」

「ふぁ……っは、くる、し……」

「相変わらず息つきは苦手な？」

こくこくと頷くと、可愛いなあマジで、としのぶちゃんが破顔する。
それが存外なほどに人懐っこくてかわいいもんだから、私の胸はちよっただけきゅんとする。

やだなあ、もう。

こんなのって反則だ。

「大丈夫か？」

今日はこのへんにしとこうな」

ぽんぽん、と私の頭を撫でて、しのぶちゃんはカウンターに入っていく。

あの日から三週間。

ここはしのぶちゃんのお店。

現在夕方4時28分。

何でこんなことになったのか、というと。

『逃げんなよ』

あの宣戦布告の直後、私はまたしてもしのぶちゃんの餌食になってしまった。

硬質そうな印象の形よい唇は、意外なことにどこまでも柔らかくて。

長々と、延々と続くキスに蕩かされ、とうとう私は身体から力が抜けてしまった。

するとしのぶちゃんはあるうことか、それを利用して更にオトナなキスを仕掛けてきやがった。

すなわち、ディープキス。

ぬるりと暖かい舌に侵入され、上顎を撫でられ、私の下半身は完全に骨抜きになる。

それをいいことに、しのぶちゃんは縮こまっている私の舌を絡めとる。

『うん……あ、やめ………』

『くちゅ………ん、ヒナ………』

ヤツが顔の角度を変える一瞬に離れようとしてみるけど、うまくいかない。

やだ、そんな優しい声で呼ぶな。
やめろ、大事なもんみたいに触るな。

いや、やめてヘンになる………！

『………~~~~っっ!!?』

『……っの、バカ!変態っっ!!!』

隙をついて奇跡の金的を喰らわせ、立たぬ腰を持ち上げ、私は必死に店を出たのだった。

それから二週間。

私はしのぶちゃんの店に行かなかった。

どんなにあのホットチョコが飲みたくなっても、である。

たかだか喰いモンと自分の貞操を天秤にかけるなんて、ありえん。

……というのは表向きの理由。

半分は嘘だった。

だって、しのぶちゃんにキスされている私の中では、もっと何か別の意思が蠢いていたから。

稀代の女泣かせの口付けはキケンな香りがぷんぷんで、何より、恐ろしいくらいに甘美だったのだ。

ねっとりと舌を這わせたり、確かめるように唇を吸い上げたりされて、うっとりと思考が白くとろけてしまう。

それと同時に私の中で、誰かが激しく警鐘を鳴らしていた。

一ダメだよヒナ、この人は……

予感や確信なんて、生易しいもんじゃなかった。その時にはすでに何か芽生えてしまった。

私の心は、もう半分くらいしのぶちゃんに持ってかれてたんだから。

そうして、私はしのぶちゃんの店に行くのをやめた。

そしたらヤツは、なんとご自慢のBMWで学校に押しかけて来やがったのだ。

いつだかの『女の子に花束のひとつくらいあげたら？』という私のアドバイスをきっちり守り、ピンクのバラの花束持って。

おかげで、どこからどう見ても『カレシがカノジョ迎えに来た』の図。

押し込まれてしまった車の中、自分自身にも釘を刺すように、私はしのぶちゃんに言い放った。

『遊びでこーゆーことしてんなら、やめてくんない？』

彼は本当にイイオトコなのだ。

顔は勿論のこと、聞くとところによれば隠れマツチヨでエッチが上手いそうだから、遊ぶ相手にはまず事欠かないのだとか。

でも私は違う。

キスとかそれ以上とか、するなら信頼できる人、好きなヒトとがいい。

ちゃんと私だけ愛してくれる人がいい。

しのぶちゃんは、そうじゃない。

そんな風に女の子を愛せる男じゃない。

どれだけ女の子に対して冷たいか、私はよく知っている。
店に行ったら修羅場、なんて珍しいことじゃなかったから。

行く末があんなのなんて、ゴメンだ。

こっぴどく突っぱねたのに、その日のしのぶちゃんは、どこまでも真摯だった。

『恋愛対象としての俺に信用がねえのは、当然だと思う』

俺がそういうのだらしないってことは、お前よく知ってるし

でも……お前のことは、大事にしたいって思ってる
ダメなんだろう、寝ても覚めても最近お前のことばっか

平日に店開けて3時過ぎるとよ、早く来ねーかなって、すげえ期待
してんだぜ？

……俺だって、どうしたらいいのかわかんなくてよ』

いつになく、感情的な口調。

苦しげに己の心情を吐露するようなそれは、存外に私の心を揺さぶ
った。

『見てみろ』

『へ？ ……わっ』

投げて寄越されたのはしのぶちゃんのケータイ。

いつだか、ちょっとした悪戯心でメールやらアドレス帳やら覗いて
大目玉喰らったことがある。

どこ見ても女の人の名前がビッチリで、受信フォルダの中はド派手
なデコメでいっぱい。

ああしのぶちゃんらしいわ、なんて、あの時は思ったのだけど。

『……うそ』

どこを探しても、女の人の名前がない。
受信フォルダはすっからかん。

ひとつもない？
冗談だろー！？

ムキになって探して、ようやく一件だけ見つけた女の名前は。

『矢井田ヒナコ』

まだメアド交換してないから、他には何も登録されてない。

『約束する』

お前が嫌がることはしない
他の奴らとみんな切れたってのも本当だ
だから………』

元々私は、お友達としてのしのぶちゃんを、かなり好ましく思っていた。

オトナだし、優しいし、美味しいものご馳走してくれるし。

あれこそまさにオトナの手練手管ってやつだったのかもしれないけど、あの時の私には、それ以上の事は言えなかった。

『いーじゃねーか、お試してことでよ
今までのタダ食いのツケ払うとも思って、なあ？

付き合ってくれる間は、他に女は作らねえ
お前の嫌がることもしねえ
俺にしたら破格の条件だろ？』

自信たっぷりのしのぶちゃんの後ろに、切実な何かを見たような気がしたから。

「ほい、おまっ子さん」

そして、現在に至る、と。

ホットチョコ代と称してエロエロでラブラブなキスをされまくり、私はそのたびにしのぶちゃんに心を持ってかれる。

まさに『テゴメ』路線まっしぐら。

「はあ………何でこんなことになったんだか」

「ああ？」

「私はもっとジュンスイな乙女のはずなのにいいいいい」

スツールの上でじたばたする私に、しのぶちゃんはやりと笑いかける。

「へっ、照れんな照れんな」

俺様の魔性のキスの虜になっちまったもんな？

ははあ……こりゃ陥落すんのも時間の問題か？

おら、言っちまえ

俺様に惚れただろうが、あん？」

「んなことないわこのスケベ！

ロリコン、ぶあーかっ！！」

この私の軽口は、一体どこまでが本当で、どこからが嘘なのか。

おーおー頑張るねえ、と口角を上げるしのぶちゃん。

最近気が付いたのだが、しのぶちゃんは私が今まで思っていたよりずっとよく笑うし、よく喋る。

きついくらいに整った男性的な顔がふあっと綻ぶと、信じられないくらいにステキなのだ。

どこかニヒルで冷笑的で、屈折した印象なんて吹っ飛んでしまうくらいに。

くだらない言い合いをしては見せるその笑顔はまっすぐで、透明とさえ言えるほど。

本当に綺麗で、魅力的。

きつとこっちがほんとのしのぶちゃんだ、と、妙な確信を持った。

頬を染める私を、頬杖ついてニコニコと眺めるその手には、もう煙草はない。

やめたのだそうだ。
私が、嫌いだと言ったから。

「……美味しいか？」

「んー、最っ高

あーあ、これで性格良けりゃなー」

「お、嬉しいこと言ってくれんじゃないの
性格なんてのはな、付き合ってりゃ慣れるもんよ
ほれ、お代くれ、お・だ・い」

悪戯っぽく目を閉じて、カウンター越しに顔を近付けてくるしのぶちゃん。

私の視界が、麗しい美形でいっぱいになっていく。

「ん？

自分からチューはまだハードル高いか？

ああ？」

瞼を下ろしたままのしのぶちゃん。

ニヤニヤ口元が緩んでいるのは、誰があんたなんかと、とかいう返事を予想しているからに違いない。

ふんっ、負けるかあっ！

「……ま、しょうがねえよな
あんまり積極的なのはおヒナちゃんにはまだはや………」

両のほっぺを手の平で包んで、顔を少し傾けて自分のそれを触れさせる。
いつもされるみたいに、唇で相手のそれを、軽くはさむように。

しのぶちゃんは面白いくらいに動揺して…

「……」

……固まった。

おっしやああ！
一本取ったり……っ！？？

「ん……………っふ！ んう、っぐ……………！！！」

いつにない驚き方に満足したのもつかの間、すかさず主導権を握られてしまう。

余裕のかけらもない勢いで私のうなじを引き寄せ、痺れるほどきつく舌を吸う。

角度を変えて何度もキスされるたびに、濡れた音が響く。

吐息さえも呑み込むように激しく口付けながら、狂おしく何度も頬を撫でてくる。

「っ……………ふぁっ！

はぁ…っ、は……………」

ひときわきつく下唇を吸い上げ、しのぶちゃんが離れた。

額の真ん中に、柔らかなもの一さっきまで私の唇に触れていたもの一が押し付けられ、小さく破裂音を立てる。

まだ開けられない瞼に、熱い視線が刺さる。

「は……………参ったな
やっぱダメだ、お前にそんなんされっと我慢もクソもなくなっちゃま
う」

そおっと目を開き、離れた唇の感触を名残惜しく拭う私に、しのぶちゃんは笑って見せる。

綺麗なラインを描く眉の眉尻を下げて、なんだか困ったような、弱ったような。

しのぶちゃんは、本当はとても優しいのだ。

今まで通りに見せかけて、横暴でむちゃくちゃを強いているように見せかけて、私に合わせて自分を変えてくれている。

まどろっこしい、お子ちゃまの私のペースに付き合ってくれている。

「他のヤツになんか、すんじゃねえぞ」

くしゃくしゃと私の頭を撫でながら言う、しのぶちゃん。

少しはにかんだような、柔らかで飾らない、ふあふあの笑顔。

おめーこそその顔、他のヤツになんか見せんじゃねーぞ！！

LESSON 3. 地獄の猛特訓!?(前編) (前書き)

テゴメ宣言からしばらく経った、ある日の出来事。
今回はしのぶちゃん視点です。

LESSON 3. 地獄の猛特訓!?(前編)

「ヒナ・・・おいヒナ」

「・・・」

「返事しろよ、おい」

「・・・」

「・・・俺が悪かった、ってなあ」

「・・・」

店の奥、いつも開けたままにしている居住スペースへのドアが、今はかっちり閉まっている。

ご丁寧にも内側から鍵までかけられて、自分ん家だつてのに入れやしない。

でも、さっきヒナまで巻き込んでやらかした醜態からすれば、仕方のないことで。

「・・・くそっ」

どうしたらいいのかわからず、頭ばかり掻きまわっている。

3日前から、昔の女に言い寄られてた。

あんたが忘れられない。

今でも好きだ。

遊びでもいいから捨てないで。

セフレでいいから。

などなど。

あっちこっちに男がいたらしく、もともと割り切った関係を望んだのは向こうだった。

なのに切れた途端にこの始末。

――三十路手前にもなって無駄玉が打てるかよ

こっちにはもうその気がないこと、他に惚れた女がいること、とにかくありとあらゆる言葉で断りまくった。

向こうさんも食い下がるモンで、あんたはアタシから離れられないだの、後から絶対後悔するだの。

最後は俺もぶっちぎれて、『今更おめーじゃ勃たねーんだよ!』とまで言ってしまったというのに。

なんと懲りもせず店まで押しかけてきたのだ。
(あるいは、あの一言のせいかもしれないが)

しかもそれは、丁度買出しでヒナに留守を頼んでいる間だった。

どうもヒナが『あんたみたいなコムスメなんか、すぐ捨てられるに
きまつてるじゃない』とか何とか言われた直後だったらしく。
俺が戻ったのは、『コムスメじゃないあなたはもっと早く捨てられ
ちゃったけどね』とヒナが返しているところだった。

二人とも言い合いにかなりヒートアップしていたようで、全く俺に
気が付いていない。

『さつきから聞いてればアナタ、セックスのことばかりね
しのぶちゃんが好きなんじゃないやなくて、オ○ン○ンが好きの間違いじ
ゃない？

ほかに自慢できるもの何かないの？

そんなもんしか武器にできないような女なんて、タダのメスじゃない
家畜とおんなじよ』

『・・・アタシに喧嘩売ろうってわけ？』

『喧嘩ふっかけてきたのはそっちでしょ
私にくだらないう自慢する暇があるなら、私からしのぶちゃん奪って
みれば？

できるもんならの話だけど』

『ふざけんな、この小娘!』

―あぶね!

逆上した女が振り上げた手を、背後から止める。

『・・・おめーとヨリ戻す気はさらさらねえつつただだろうが』

『シノブ! あんまりじゃない!!』

どんな子に入れ込んでるかと思えば、こんなガキ!』

『若けえだろ、羨ましいか?』

『あんた言ったじゃない、アタシが一番抱き心地がいいって!こんな生意気なクソガキのどこがいいのよ!?』

『・・・いつの話だ、いい加減にしろよ』

握った手首を軽く捻り上げると、女は大仰に泣き喚く。

『ひどい! ひどすぎる!!』

アタシはあんたとやり直したいだけなのに!

何でここまで言われなくちゃいけないのよ!』

『話があるんなら俺に言えばいいのに、こういう卑怯なことをするからだろ』

それとも何？

昔の話引き合いに出して、揺さぶりかけるつもりだった？

おめー、相変わらず汚え真似すんのな

・・・次にコイツに手え出したら、容赦しねえ

覚悟しろよ』

更に力を込めると、痛みに耐えかねた女はそれを振りほどき、カバンをひつつかんで出て行った。

向き直った先にいるヒナは既に背中を向けていて。

ーぱた、ん・・・かちやつ

静かにドアの向こうに行ってしまった。

「ヒナ・・・俺のせいだ

お前にイヤな思いさせて悪かった
頼むから返事してくれ

ヒナ、ヒナ！」

待てど暮らせど返事はなく。

こんなときに煙草がないのは、正直キツイ。

―最後の人だったよね、あのひと

イライラとドアのあたりをうろついているときにやっと聞こえた声は、冷静そのものだった。

「・・・え？」

―あのひと、しのぶちゃんが一番最近まで付き合ってた人でしょ？

そのとおり、だった。

ヒナと知り合って、割りに親しくなってから時々会っていた女のひとり。

本人が言ってたように、身体の相性が良くて最後まで切れなかった女だった。

―それも、結構お気に入りだったよね、あのひと
しのぶちゃん、よくあのひとと同じ匂いさせてたもん

「・・・そうだ」

―抱き心地がよくて、手放し難かった？

「・・・」

―ふ・・・ん、そっか

「ヒナ・・・あのな」

―長々と教えてくれたよ

しのぶちゃんにどんなふうに抱かれたか、とか
どうしたらしのぶちゃんが悦んだか、とか

・・・っあのクソ女!!

「ヒナ・・・・・・悪い」

―何でしのぶちゃんは私がいいの？

手にかかる、10も年下のコスメの、どこがそんなに気に入っ
たわけ？

なんで、なんでしのぶちゃんに好かれてるってだけで、あんなに
好き勝手言われなきゃなんないの!?

―ドスン！ ドカン！！

「おい！ ヒナやめろ！！」

背筋が寒くなる。

奥には店に出そうかと思っていた、値の張る食器類がごっそり置いてあるのだ。

「ヒナ！ ヒナ落ち着け！」

―じゃあてめーはコドモだったことはなかったのかよ！？

生まれたときは男はみんなドーテーだし女はバージンだろうが！！
生まれつきヤリ○ンだったってのかてめーは！！！！

私がバージンで何が悪い！！？

―がさがさ、パリーン！ ガシャーーーン！！！！

「ひ・・・っ、ヒナ！

頼む、頼むからやめてくれ！！

お前が悪いなんてことひとつもねえから！

俺のせいで不愉快な思いさせて、マジで悪いと思ってる！
落ち着け！ ドア開けてくれ！！」

―バタン！

「あんたのせいだかねしのぶちゃん！
厚化粧ババアにあんな好き勝手言われるなんて！！

大体、自分の惚れた女バカにされて悔しくないわけ！？
責任とってちゃんと私のこと女にしなさいよ！！！」

「・・・は？」

「あつたりまえでしょう！
私を馬鹿にしたクソ女を見返してやるのよ！！！」

鼻息も荒くヒナの言い放った一言に、俺は思考が止まってしまう。

「ヒナ・・・お前、自分の言ってること、わかってるか？」

「はぁ!?!」

「お前、それ・・・その、なんだ」

「何よ!?!?」

「はぁ・・・・・・」

誰か助けてくれ。

何で、何で惚れた女にこんなこと言わなきゃなんねーんだっ!!!

「あのなヒナ・・・
責任とって女にしろって、それ『私を抱け』って言ってんのも同じ
だぞ?」

「そおよ?
しのぶちゃん、まさかキス止まりにするつもりだったの?
私をキレイ可愛いでお人形扱いするつもりだったんじゃないでしょ
うね!?!」

「う・・・」

「!?!? 信じらんない!
そんなんだから私あんな尻軽ババアにバカにされんのよ!

あんた私が好きなんでしょ!?

私落とすためにセフレみんな切ったんでしょ!?

最後までいなくてどうすんのよ!

こないだまで下半身だけで生きてたようなあんたが我慢できるわけないじゃない!!

それとも何?

私をモノにしたらまた何人も女作って遊びまくるつもりだったってわけ!?

「違えよ!

約束しただろ、お前がイヤがることも、傷つけるような真似もしないって!

信じてくれよ!!」

すううつ、とヒナの目が細くなる。

不謹慎だが、頬を真っ赤にして瞳を潤ませて激怒するのも、今みにいに冷たい視線をぶつけてくるのも、ぞくぞくするほど綺麗だ。

ああちくしょう。

「・・・やるわよ、しのぶちゃん」

「は・・・?」

ヒナはくるりと背を向け、また居住スペースに入っていく。

「ちょ・・・・・・・・おい！」

追いかけて進んでいく道すがらに落ちているのは、ヒナが着ていたはずの服。

スカート。

セーラー服。

靴下。

そして。

「・・・・・・・・おい！」

「10分で出る！」

ビビんないでベッドで待ってなさいよ!!」

追いついたと思った頃にはシャワーの音。

開けっ放しの脱衣所には、清楚な下着がハラリと残され。

「マジか・・・」

呆然とする俺も、残されたのだった。

LESSON 4. 地獄の猛特訓!?(後編)(前書き)

しのぶちゃんを残してシャワー中のヒナコ。

勢いこんだはいいいけど、売り言葉に買い言葉で……。

ヒナコ視点に変わります。

LESSON 4. 地獄の猛特訓!?(後編)

「みてろ、あのクソババア・・・!!」

がしがしと身体を清めながら、私は煮え立つはらわたのままに悪態をつきまくっていた。

エッチしたことがあるとかないとかが、何でそんなに自慢なんだか。それだけ自分たちは親密な仲ですよ、って言いたいってことなのか。

バカみたい。

しのぶちゃんみたいな人にとっては、そんななん何の意味もないのに。

「・・・」

自分で思い至った思考に、思わず手が止まる。

そうだ。

しのぶちゃんにとっては、女の人と寝たかどうかなんて、あんまり

大したことじゃない。

今、私がこんな一大決心していても、そんなに大事じゃない。

「いやいや、いやいやいや」

頭を振りながら、また身体を洗い始める。

ここで足踏みしたら、さっきのオバさんの思う壺。

いくとこまでいったろうじゃありませんか！

この際、都合の悪いことは考えない考えない！

でも。

頭とは裏腹に、身体を洗う手の動きは鈍くなる。

「うううううう・・・」

すっきりと全身を清めた頃には、心は鉛のように重くなっていた。

「・・・」

そおっと、脱衣所から顔だけを覗かせてみる。

脱ぎ捨てた下着がなくて焦ったが、回ってる洗濯機に、洗ってくれているらしいと知り少し安心。

いやいや、ということは乾くまではノーブラノーパンだぞ、ヒナコくん。

どうしたものか、と不安でいると。

「お、出た？」

「ひえっっ」

「はは、やっぱ俺のじゃでけえな」

だぶついているバスローブの袖を引っ張りながら、しのぶちゃんが笑う。

「おら、いつまでもそんなとこいねえで出て来い」

「あ、あうう・・・」

引っ張られるままに進んだ先は寝室。

ぽんぽん、とそこに座るよう促されるので、戸惑いながらも従う。
隣に腰掛ける、しのぶちゃん。

「で？ 何をするって？」

「う・・・うぐ」

「厚化粧ババアに一泡吹かしたるってか？」

濡れた私の髪を梳きながら、落ち着いた視線で問いかけてくる。

「・・・ムリはしない方がいいんじゃないやねえの？」

俺あそりゃ、願ったり叶ったりだけど」

「はあ・・・そりゃアンタあ慣れてるでしょおよ
私あこんな・・・」

自分がものすごく、惨めな気持ちになる。

覚悟して隣に座ってるってだけでこんな心臓ばっくばくなのに、当
の相手は手馴れた大人のオニーサマで、全っ然余裕で。

「おい・・・ヒナ、こっち向け」

「なによ・・・っ」

顔を上げた途端にむぎゅうとハグされる。
ちようど右耳が押し付けられる、左胸。

そしてそこから聞こえるのは、余裕綽々の態度とは正反対の心音。
奥にある心臓が、私なんかよりずっと早鐘を打っている。

「・・・慣れてるだあ？」

言ってくれるよなあ毎回毎回よオ」

「あ・・・や、だって・・・」

「お前ね、そろそろわかってくれないかね？
本気で惚れた相手とどうこうなろうって時に、緊張しねえヤツがい
ると思うか？」

「う、でも・・・」

「でももへチマもねえ
まったく、自分がキノドクで泣けてくるわ」

しくしく、なんて、珍しくおどけて見せたりするしのぶちゃん。

「そりゃな、俺あお前より大分年上だし、あんま褒められないような事もしてきた
けど、だからってお前が無理して俺に合わせようとしなくたっていい」

「・・・」

「ヤケおこしてこんなことしても、何にもなんねえだろう？
俺あお前がマジでその気になるまで待つてるから
焦んなって、な？」

「・・・よく言うよ」

下半身の衝動だけで生きてるくせに
どうせ今だって適当に何とかしてんでしょ」

「・・・いんや」

三十路にさしかかろうって年寄りにゃあ、子種の一滴一滴が惜しいわけよ

惚れたヤツの他に使うなんてもったいない
ま、お前は信じないだろうけどな」

「・・・じゃ今どうしてんの？」

「・・・知りたい？」

「・・・あう」

「は・・・可愛いよな、お前って」

しのぶちゃんは柔らかに笑い、ちゅ、と額にキスしてきた。

いやらしさやエッチなムードとは無縁の、親が子どもにあげるようなキス。

何故かそれが、少しだけ寂しい。

面と向かって、「お前はお子ちゃまだ」って言われているみたいで。

「・・・じゃ、ないよ・・・」

「ん？」

「私、コドモなんかじゃないよ・・・」

「ヒ・・・っん！」

言いながらしのぶちゃんに重心を傾けていく。

ふあん、と唇をくつつける。

びっくりしてベッドに転がったしのぶちゃんにのしかかって、ぎゅーっと思を閉じ必死のユーワク。

「ヒ、ナ・・・やめ、んん・・・っ」

制止の言葉なんか聞きたくない。

喋らせないようキスを続けたまま、しのぶちゃんのシャツの裾に手をかける。

大きすぎるバスローブが、少し肩からずり落ちた。

恥ずかしくて顔に血が上るけど、そんなの気にしてられない。

勇気を出してしのぶちゃんのシャツを上を引き上げると、「あゝー
ー！ーもう！！」と絶叫が響いた。

びっくりして開けた目にうつる、顔を真っ赤にして瞳を潤ませたしのぶちゃん。

「な・・・っけなしの理性かき集めてるっつのにオマエわあああああ
ああっ！」

「わっ・・・きゃああっ！！！」

「そんなにやりたきゃ相手になろうじゃねえの、あー！？
今更止めろとか又かすなよ・・・！」

途端にしの子ちゃんの目の色が変わる。

ぐるん、と視界が反転して、ベッドに身体が転がされる。

脚のあいだにしの子ちゃんの筋肉質な身体が割り込んでくる。

瞳に光る危険な何かが色濃くなり、ひとつひとつの動きが獣じみてきて。

焦らすようにゆっくりとバスローブの紐を解きながらする舌なめずりは、男っぽい、じゃなくて、「牡っぽい」動き。

恐ろしく強い眼光に射すくめられ、身動きさえ忘れた私の首元に、しの子ちゃんが顔を埋めてきた。

やだ、こわい・・・！

「・・・は~~~~あ」

特大のため息に続く、舌打ち。

私の、さっきにも増してぎゅっと閉じた目頭のくぼみには、涙が小

さな水たまりを作っている。

硬直したままの私に、ひーな、と冷静さを取り戻した、しのぶちゃんの声。

「怖え、って思っただろ？」

目を閉じたまま、ぶんぶん頷く。

「動けないくらい、ビビッたな？」

またぶんぶん首を振る。

「そ、それでいい

ヤケツパチになんてなるな

俺あお前をガキだと思って、足踏みしてるわけじゃねえ

ただ、お前にちゃんと好かれたいだけだ

だから、マジで俺とやりてえって思ってからにしてくれ、な？

身体だけれども、足りねえからさ」

言い含めるような、優しい声に、どわーっと涙が溢れる。

「・・・う、う~~~~っ」

「・・・あーあーまったく
無謀なことしやがってよお」

きつい台詞とは裏腹に、抱き起こした私を膝に乗つけて頭を撫でる
仕種は、この上なく優しい。

「心配しなくても、俺は頭のとっぺんから足の先まで、ちゃんとお前のもんだ
だからもう泣くな」

「ぐず・・・」

「お前がほんとに俺に惚れて、キスとかハグだけじゃあ足んねえくらいになるまで、俺のカラダは大事にとっとくから
約束だ、な？」

「ずず・・・うん・・・」

「あー・・・でも、元と言えば俺の不誠実な過去のせいだよな
ごめんなヒナ、俺のせいだな」

ぐりぐり後頭部を撫で回しながら、寂しい声で私に謝るしのぶちゃん。
ん。

見上げると、しのぶちゃんはやっぱり寂しい顔で、切なく私を見て
いた。

やだもう、そんな顔しないでよ。

「仲直り、してくれるか？」

胸がぎゅう、と痛くなるような笑みで、しのぶちゃんは尋ねてくる。
私はすぐさまこくん、と頷く。

「どうしたら、許してくれる？」

「キス・・・」

「ん？」

「キス、して・・・」

ぱちぱち、としのぶちゃんがまばたきする。少し複雑そうな表情の後ろに見える、影みたいなのがすごく嫌だ。

かける言葉が見つからなくて、かわりにしのぶちゃんのシャツの背中を握りしめる。

目だけで訴えると、躊躇いがちにしのぶちゃんが聞いてきた。

「・・・いいのか？」

「ちゃんと、おとなのやつね・・・」

ぎこちなく笑いながら言うと、すぐにしのぶちゃんの唇がかぶさってきた。

さつき額にされたのとは違う、ふあふあで濃密で、とろけるみたいに甘いキス。

唇をついばまれるたびに、身体の奥がじーんとする。頭が真っ白になる。

こういうキスでも、緊張しないような大人になりたい。
もっとしのぶちゃんに応えられるような、大人の女になりたい。

背中を撫でるしのぶちゃんの手の平があつくて気持ちよくて、ずっとこのままでいたくて、離れようとするしのぶちゃんの唇を何度か引き留めた。

それがちょっと恥ずかしく思えて、しのぶちゃんの動きに合わせてゆるりと距離を取る。

はにかみながらしのぶちゃんを見上げる。

笑いかけてくれるだろうと思っていたしのぶちゃんは、私の予想と違っていて。

「・・・・・・・・」

私と自分とのあいだの、わずかな隙間にくぎづけ。
そしてその頬が、見る間にかあああっと紅潮した。

「??.」

頭から湯気でも噴きそうなその勢いに首を傾げる。

そうしながら、妙に身体がスースーすることに気付く。そういえばさつきも、しのぶに触られる感触がやたらリアルだったような。

まるで素肌に触れられてるみたいなの……

……素肌だあ!?

イヤな予感を確かめるべく、恐る恐るしのぶちゃんの視線の先を辿って目線を下げる。

「…………ぎゃあああああっ!」

「み……っ、見てねえっ!

俺何も見えてねーからっっ!」

しのぶちゃんの膝の上、紐を解かれたバスローブはすっかりはだけてしまい、私は八割、いや九割がた裸だった。

当然しのぶちゃんからは、胸やら、お腹やら、お、オマタやら全部

まる見えだったわけで。

「バカバカバカ見るなーっ！
もーしのぶちゃんのエッチー！ー！」

「見てねえっ！
イテ、こら、やめろ・・・っ、見てねーって！！」

「きゃーっ、きゃーっっ、きゃーっっっ！見ないで！やあ！バカッ！
いやあーんっ！！」

「わっ、こら！暴れるなっ！
見えてねえってば！！！」

「嘘つき！
ほっぺ真っ赤にした癖にー！！
もーお嫁に行けないー！！」

「ヨメなら俺がもらって・・・イデっ！
やめ、バカ握るな！」

「にぎ、握ってないっ！
な、何なのよコレはっっ！！？」

「何もクソもおめーが煽るからだろーうが！今から責任取ってくれん
のか？ああ？」

「！！ もおやだーあっ！！」

しのぶちゃんのばかあーっ！」

ふたりして真っ赤な顔をした、私としのぶちゃんのくだらないやり取りは、その日私のパンツとブラジャーが乾くまで、延々と続いたのだった。

LESSON 5. タラシの嫉妬は蜜の味（前書き）

前回の騒動の翌日のふたり。

今回は三人称での語りになります。

LESSON 5. タラシの嫉妬は蜜の味

「ね……誰あれ？」

「知らない

でもチョーかっこいい」

「最近よく見るよね」

「誰かのカレシとか？」

「え、誰の！？」

「うーん……現国の伊藤っばいかも」

「あーあたし見た！

巨乳メガネがクネクネしながらあの人に話しかけてるの！」

「じゃやっぱカレシ！？」

「違えっつの……」

ダルそうに愛車に寄りかかる、キケンな匂いのイイオトコ。

ぼさぼさの銀髪が風に揺れて光り、端正な顔を引き立てる。

上背のある身体に、きゅっと締まった筋肉。

半袖から覗く太く長い腕は浅黒い肌をまとうていて、男性的な魅力をより一層引き立てる。

いつものように自慢の外車を校門に横付け。

しかし口には久方ぶりに、手持ち無沙汰な風情で煙草を銜えている。

―巨乳メガネのセンサーなあ……………

少し離れたところから聞こえて来る噂話に、彼はなんとなく耳を傾けた。

思い出すのは、ここ最近毎日自分に話しかけてくる、やたらに胸の大きい、黒縁メガネの女。

ゲンコクノイトウ、とは、きっと彼女のことなのだろう。

あんなのが教師なんてやっていいもんなのか、と男―史惟―は考える。

痺れを切らした件の女は昨日、思いっきり自分をナンパしてきたのだから。

もったいぶったような言い方をしていたが、簡単に言えば「ワタシの大きなオッパイ、興味ない？」というところ。

「男がみんなウシみたいな乳が好きだと思っなつての

気鬱気味に、史惟は紫煙を吐き出した。

喫煙とはすっぱり縁を切ろうと思つていたのに、昨日の騒動があつてどうにもこうにも吸わずにはいられなくなつたのだ。

「吸いたきゃ吸えばっ！」との了承のもと、不本意ながら吸い込む煙の苦さが、こんな時にはたまらなく美味い。

そして。

「……あう」

影からそれを見つめるジョシコーセー、ひとり。

「なんで今日も来るかな……」

ひとりごちながらも、彼女―ヒナコ―は喜んでいる自分を自覚していた。

毎日毎日、「あの」しのぶちゃんが迎えに来てくれる。

だらしなくてめんどくさがりで、来る者拒まず去る者追わずの、あの男が。

「ハウ……」

校門を出れば、『オウ、遅えっつの』と言いながらも、ぱあっと機嫌よく破顔して自分を迎えてくれる。

いつもなら、鬱陶しいような悪くないような、でもやっぱり嬉しい気持ちになるのに、今日のヒナコはそうではない。

史惟に会うのが恥ずかしくて恥ずかしくて、どうしようもない。

何故なら、昨日はアンナコト―あろうことかハダカで抱き着いた上で、熱烈な口付け―をしてしまったわけで。

「っー」

思わず唇を押さえたのは、リアルにその感覚が蘇ってきたから。

史惟と交わしたキスは、いつにも増してふわふわ熱くてとろけるように、とても気持ちよくて、いつまでもこうしていたいと思うくらいだった。

素肌の背中をきつくかき抱かれる感触や触れた場所から伝わる体温は、まるで今もその名残が色濃く身体に残っているみたい。

しなやかで力強い、すこし血管の浮き出た腕に引き寄せられるのは、ちっとも嫌じゃなかった。

もつとぎゅっとしてほしくて、自分から首に巻き付けた腕に力をこめたのは、ほぼ無意識のうち。

—ヒナ……

ガサツでだるそうな言葉しか吐かないはずの低い声が、甘く掠れて自分を呼ぶ。

やるせなく自分を見つめる女ったらしの、冷たい色の瞳を思い出しでは、ヒナコの頭の中はぼわぁんとオトメチックなピンク色。

あるとき史惟がハダカだったら、どんな感じだったろう。

身体じゅう全部で、彼の浅黒い素肌の温もりや匂いを感じられたら、

どれだけ気持ちがいいだろう。

不埒な夢想は夜中になっても勝手に沸いて来るものだから、おかげさまで本日はバッチリ寝不足。

授業中などついというたた寝してしまい、先生に「やる気がないなら出ていって来て結構」とぴしゃりとやられてしまった。

「……………はあ、ん」

気を抜けば即座に頭の中に浮かんでしまう、彼と自分がすっぱだからみあう姿。

見た目よりずっと柔らかな史惟の唇が、甘くたっぷりとヒナコのそれを愛でた後、顎を通して少しずつ降下していく。

魔法みたいに美味しいものをつくるあの器用で大きな手が、背中や頬を優しく撫でる。

形の整った爪の、骨張ったあの指は、どんな風にこの身体をたどるのか。

舌先で肌のキメを確かめられ、痕を付けられ、宝石みたいに冷たく綺麗な瞳に見つめられるのは、どれほど甘美だろう。

首筋を撫で、鎖骨の窪みを吸い上げ、それより下にある、あたしの、ち、ち、ち…………ち#&を※\$%*@して…………！

「わあああああっ！」

爆発しかかる理性と、暴走するいかがわしい妄想。

バカバカバカ！とばかりに、ヒナコはぶんぶん首を振る。

こんな時に本人と平然とした顔で会えって方が無理な話で、でもやつぱり顔は見たいわけで。

オトメの心中はいささか、いや、相当複雑なのであった。

「何してんだ矢井田？」

「！麻宮、くん」

話しかけてきたのはサワヤカ少年。

日本人離れしたくっきりした目鼻立ちに、くりんくりんの巻き髪。

きらきらと漆黒の瞳を輝かせて話しかけてきたのは、同じクラスの
マミヤシヨウ
麻宮 誓。

この学園の生徒会長にして理事長の息子だ。

噂によればアラブ系人種のクォーターだそうで、その人気は学園ぶ
つちぎりNO1。

必殺技は、メスなら猫でも堕ちるといふキラースマイル、とか。

「あ、あいつまた来てる」

「麻宮くん知ってるの？」

「ん 最近毎日あして誰か待ってるんだ
まったくいい迷惑だよ、学園の風紀が乱れるね」

「ふ、風紀って……」

「だって見てみな

あれだけのいい男が下校時刻にあんなどこにいたら、誰だって気にな
るだろ？」

女の子なんかみーんなそわそわしてるし
伊藤先生なんてこないだから………」

「伊藤先生？」

「しっ……矢井田こっち！」

話をさえぎり、麻宮はヒナコを引っ張る。

一緒に校舎の影に隠れさせたのは、見ていた先に変化があったから。

現国の伊藤先生が、史惟に話しかけたのだ。

それも何とも嬉しそうな、見たこともない満面の笑みで。

「ほら、あれ」

「え……うつそー!？」

「こないだからずっとあぁなんだ

職員室の窓から見えるみたいでさ、あいつが来た途端飛び出してきた、あれよ」

女王様オーラを撒き散らし、本日居眠りしてしまった自分にきつい言葉を投げてきた「あの」伊藤先生が、思いつきりしなを作り、カワイコぶってアピールしているのが遠くからでもよくわかる。

噂で生徒のカレシを寝取ったとかあったが、あれもあながち嘘ではないのかも。

「うあー……」

視線の先には銀髪的美青年と、彼に馴れ馴れしく接する校内イチのセクシー女教師。
タルそうな三白眼で煙草をふかすしのぶちゃんに、伊藤先生はフェロモン全開の表情で喋り続けている。

「……井田、矢井田ってば！」

ぐい、と掴まれる両肩。
くるんと変わる、視界。

サワヤカ少年が、心配そうにヒナコを見つめている。

「!」

「やっぱり
全っ然聞いてないし」

「え、あ、ゴメン
何か言った？」

「お前今日ヘンだぞ？」

目の下くまくつきりだし、授業上の空だし突然叫び出すし、すごい顔してあいつら見てるし
今なんか殺気が出てた」

「は……さ、殺気？」

言いながら指先でヒナコの下瞼に触れてくる麻宮。

「ほら……ちゃんと寝てるか？
もうすぐテストだぞ？」

「ん、まあね」

やたらにボディタッチが多いような気もするが、それも文化の違いかも、などと呑気なヒナコ。

史惟がすごい形相でヒナコと麻宮を睨んでいることにも気付かないあたり、寝不足加減が見て取れる。

「！

もしかして、お前……」

突然麻宮が寄越してくる、哀れむような視線。

肩を掴んだままの麻宮の手に、力が入る。

「矢井田…お前まさか……………」

「……………」

ぽおつと冴えない表情のまま、麻宮の言葉を待つヒナコ。
その間ふたりの顔がだんだん近付いているのだが、先程の麻宮の指摘のせいで、今度はヒナコの頭はテストのことで一杯。

視界がだんだんアラブ系美少年のアップで占められ、ようやく顔の近さに気付きはじめた、その時。

「はいーそこまでー」

突然割って入ってきたのは、さっきまで睨んでいたはずのあの男。
まだヒナコの肩を掴んでいる麻宮の手首を、ぎゅう、と握って。

「いっ…………て!」

「!?! ちょ、しのぶちゃん!」

「やるなあお嬢」

俺というもんがありながら別のヤツといちゃつくなんぞ、いい度胸してんじゃねえの」

「ちが……ちょっと、伊藤先生は？」

「ああ？ 知らねーよ
ほら、帰っぞ」

「痛ったっ！ 待って、しのぶちゃ……あ、麻宮君またねっ」

カバンを取り上げられひとまとめに両手首を捕まえられ、ずるずると引っ張られながら、ヒナコは啞然としているサワヤカ少年に別れを告げた。

「っわ!!」

無言で車に押し込まれ、ものすごいスピードで向かった先は史惟の店。

ヒナコはやっぱり両手を捕まえられて、なす術もなく壁際に押し付けられる。

「で？ 誰だありゃ？ ああ!？」

「……クラスメイトの麻宮くん」

「何してたんだ、あんな影でふたりしてよお」

「何よ、何でそんな詰問されなくちゃいけないわけ？」

「うるせ、聞いてんのは俺だ

答えろよ、何してたんだ」

「その前にコレ離して」

「……………」

「は・な・し・て」

ヒナコにきつく睨まれ、史惟はぼさぼさの前髪に表情を隠して、ゆるりと離れる。

ちよつと赤くなった手首をいって、と軽く振るヒナコ。

「……残酷だよな、お前」

「はあ!？」

ちよつと同級生と話してただけじゃない
伊藤先生をあれだけべったりしてたアンタに言われたくないわよ」

「あのな、誰が好き好んであんなウシ乳メガネといちゃつくかよ」

「えーえーそうでしょうとも

しのぶちゃんみたいなイイオトコには自然と女も寄ってきますもんね」

「んなこと知るかよ!!」

「!」

突然の大声に身をすくめるヒナコに、史惟はまたつかつかと寄ってくる。

「どんな女が寄ってこようが、話しかけようが関係ねえ

どこの誰が俺をどう思おうが、どうでもいい

お前じゃなけりや、意味なんかねえんだ

俺が毎日会いたいのも、話したいのも……みんなお前だけなんだよ!」

「……………」

「チッ……」

言わすなよ、こんな恥ずかしいコトをよお」

「……………」

固まっているヒナコに、勝手に熱烈な台詞を囁き、勝手に赤面している銀髪的美男子。

まったく、こないだまで車の助手席からTバックが出てきたような男の言葉とは思えない。

「もしかして……ジェラシー、ってやつ？」

「ったりめーだろ！？？」

おめーの周りには俺なんかより若えサカッてる連中ばっかなんだぞ
！？」

「サカッてるだあ！？？」

あんたが言うかそれ！？？」

こないだまで女モンの香水プンッポンだった人が！」

「うっせっ！」

荒々しく吐き捨てる台詞も、耳まで真っ赤じや様になんてなりやしない。

それにしたって、ものすごく、本っ当に傲慢で自分勝手な言葉。

何人もの女性を泣かし、遊びまくり、適当で心無いことしてきた男の癖に。

—……かわい

ヒナコは心の中でくふりと笑う。
まるで、ヤキモチ焼きな小さな少年みたいだ、と。

「……怒ってる？」

「怒ってねえ」

「じゃあ、拗ねてんの？」

「拗ねてねえっ！」

「自分だってセクシー美女といっちゃいちゃしてたくせに？」

「あんなヤツ知らねっ！！」

近づくヒナコからとことん顔を背ける史惟。

それにくるくると纏わり付くヒナコ。

とうとうするりと懷に入り込み、分厚い胸板に顎をのせて史惟を見上げる。

不機嫌な顔のままなのに、史惟の腕はきちんとヒナコを包んで。

「ね、こっち向いてよ」

「……」

「ねえってば」

「……」

「史惟」

思わず視線を向けてしまったのは、初めて呼び捨てにされたからな
どではなく、その声にいつも自分と呼ぶときとは違う何かが込めら
れていたから。

見やった先に認めるのは。

「……！」

ふわりと花が綻ぶみたいなの、初めて見るヒナコの微笑。

軽口のたたき合いをしているときとは違う、かわいらしくてふんわりした、「女」の笑みに、史惟には思える。

「麻宮くんは、ほんとにタダの同級生

私が寝不足でフラフラしてたの心配してくれたただけなの」

「……」

「ねえ、もうこんな言い合いやめよ？」

私も伊藤先生のことはもう言わないからさ」

少し軟化した声音で言うと、史惟は縋り付くようにヒナコの肩に顔を埋める。

「…………俺すげーカッコ悪い」

「くす……ほんと」

「お前が他のヤツと一緒にっただけで、いてもたってもいらなくなる」

「惚れられたもんね、私も

まあ、でも……妙な誤解させたのは、私が悪い、かな」

自分に好意を持つ相手の心を悪戯に弄ぶのは、ヒナコの性分ではない。

たとえそれがわざとでなかったとしても、である。

「仲直り、しよ？」

目線を合わせて問い掛けると、史惟は情けなさの不機嫌さの残る顔のまま、ヒナコに頷いてみせる。

「またハグしてくれる？」

腰を支える史惟の腕が、くっ、と締まる。

「キスは？」

途端に唇に重なってくる、熱を孕んだ柔らかなもの。

初めての時のように少し煙草くさいそれが、上下の唇を食み、眩暈さえしそうに甘く舌を吸い、せわしなく音を立てて顔中に触れてくる。

満足げに笑みを深めるヒナコは、最後に史惟にもう一言。

「また私を好きでいてくれる？」

「つたりめーだろ……」

史惟の即座の返答に、またヒナコがふわりと笑う。

心をほどいて見せるような、自分の全てを明け渡すような、飾りも繕いもしない表情。

たまらず史惟が再びヒナコの唇を塞ぐ。

その史惟の唇をヒナコが食んでうけとめる。

ただ微笑まれるだけで、こんなに心が昂ぶる。
抱きしめるだけで、唇を合わせるだけで、涙さえ出そうになる。

ヒナコだけいてくれたらいい。

ヒナコだけが欲しい。

小さくて心許ないほどの唇の感触に、史惟は溺れていく。

腕に力を込めれば、呼応するように細いヒナコのそれもしがみつく
力を増すのがわかる。

もっとヒナコに近付きたい。

自分とヒナコを隔てる服の一枚、糸くずの一本さえも取り払って、
深く深く繋がってしまいたい。

今の彼女にそれを求めるのは……ただの自分のエゴでしかないけれど。

それでも、いつかこの素肌に触れることを許されるときが来たなら、
と願いながら、史惟はそっと唇を離す。

「へ……っ

俺にそーゆー顔して見せるかよ？」

「そーゆー顔って、どんな？」

「『まだ離れたくない』って顔」

「な……っ、ヘンなこと言わないでよっ」

名残惜しそうに見上げてくるヒナコに話し掛ける頃には、史惟はすっかりいつもの調子。

からかうようなその口調に言い返すヒナコからも、さっきの、一瞬で史惟を魅了した微笑は消えていて。

一離れたくないのは、俺の方だよな

どうしようもなくヒナコを求めてしまう自分の心を、彼は密かに自嘲する。

もはやそのもどかしさも願望も、自分ひとりだけのものではないことを、史惟はまだ知らない。

LESSON 6. 乙女ドキドキ初デート（前書き）

そういえばデートがまだでしたね。

その事実気付いた二人は早速お出かけ。

ヒナコ視点がベースですが、彼女の知らないところで……？

LESSON 6. 乙女ドキドキ初デート

金曜日 14:05

「ねーえ〜」

「……………」

「行ーきーたーい〜」

「……………チツ」

「ねーえ行こーよ〜」

「んダアーツ！！ 煩え！

わかったっ、わかったよ連れてきやいーんだろっっ」

「やーったーあ！！

しのぶちゃん最ッ高♪」

ねちねちねち…と食い下がること、およそ2時間。

創立記念日で休校なのをいいことに、私は午前中からのしのぶちゃんのカフェに入り浸っていた。

来てから今までの間にタダ食いたもの。

ロイヤルミルクティーをハチミツ入りで2杯、クリームたっぷりコーヒージェリーに、ダージリンティーはストレート、りんごのタルト

シナモン風味、ここまで食べたところでお昼になったので、しのぶちゃんと一緒にカレー食べて、デザートには出来立てのチーズスフレを、ほんでちょっと口が甘くなったので草加センベイをかじり、合わせて煎茶と、お口なおしにすあまをふたつ。

さらに、ねちねち攻撃にしのぶちゃんが陥落したときにはこれでもまだ足りず、3つめのくるみゆべしを頬張っていた。

「んんんまいっつ！

しのぶちゃん、お茶おかわり！！

あ、あとオレンジとチョコのクレープチョコレート」

「はっっっ！！

おま……まだ食うのかっ！？ しかもクレープだぁ！！！？」

「い・い・の

アタクシいくら食べても太らないんですの
かわりに背が伸びまくるけど」

「っっっ、信じらんね……

その身体のどこに入るんだ……」

「女体は宇宙よ、し・の・ぶ・ちゃん♪

あ、それはよく知ってるか」

「っ、うつせつ

余計なこと言う奴は連れてかねーぞ、デート」

私は思わず、その台詞に目が点になってしまった。

思考停止気味にまばたきをくりかえす私を、しのぶちゃんが不思議そうに見つめる。

「……でえと？」

「ああ？」

「や……だって今デートって」

「……違うのか？」

男と女がサシで外で会って、どっかで遊んでメシ食って……いたらまんまデートだろ、というしのぶちゃんの声が、遠くでわんわんしている。

そうだ、でで、デートだ……！

し、し、し、しのぶちゃんと、ででででデート………！！

「は……ったくよお、こんのクッソ暑いのに……」

舞い上がってる私に降ってくる、いかにも面倒くさそうなしのぶちゃんの声。

瞬間的に、頭にカツと血がのぼる。

「っ、なによ！　いいじゃない一回くらいデート連れてってくれたって！」

好きだとか何だとか言っ、今までどこも連れてってくれたことなんてないんだから！」

「ああ？　そうか？」

「そうよ、私がいつも店に来るからっていい気になってさ！」

私はしのぶちゃんが今まで相手してたお手軽尻軽さんたちとはわけが違うんだから！」

会いましたーはいラブホ行きましょー、なんてのとは違うんだかねっ！！」

照れ隠しと、ちょっと傷ついたのをごまかすのに、言い過ぎってわかってても言葉がとまらない。

なのにしなのぶちゃんは、めずらしく言い返しもしないで。

「あゝ……そりゃ悪かったな、気がきかねえでいいぜ、どこでも好きなどこ連れてってやる」

私の頭をぽんぽん、なんてして、ふんあり優しく微笑うもんだから。

「…っ、市営現代美術館、明後日朝10時！
男に二言はナシだからね！」

もう決定だからねっ!!」

その笑顔を見続けていられなくて、残ったくるみゆべしを煎茶で流し込んで、スツールを降りて出口に向かう。

「おい、クレープは？」

「今日はもういいっ」

「あんだよ、フライパンあっためたのに」

「私あねっ、これからすることがあるのっ」

「おお？ さっきまで何も言ってなかっただろが」

「……デートの準備よっっ！」

しのぶちゃんと……っ初めてのデートなんだから!!」

あんたのためにめいっばいおめかしするのに時間がかかるんだ、なんてことは当然言えなくて。

「時間厳守！」

約束から5分でも遅れたら帰ってやるんだからっ」

振り返ってそこまで叫んでから、私は大股で店を出て行った。

「……………」

私の言わんとしたところを理解したしのぶちゃんが、ほっぺをポリポリ掻きながら耳まで赤くなって嬉しそうに笑ったことに、気がつかないまんま。

日曜日 9..58

「うあーんもお私のバカバカバカッ!!」

いくら昨日の夜眠れなかったからって、電車の中で寝過ごすなんてありえない失態だ。

しかもこんな時に限って、履いてるのはいつものスニーカーじゃなくてヒールの高めのミュール。

走ろうにも、これじゃあ転ぶこと必至。

「ああんもう遅れちゃうよ……………!」

中途半端な早足で向かう待ち合わせ場所には。

「……！！！！」

細身のインディゴジーンズといつものゴツいアクセサリーで決め込んだ、しのぶちゃん。

（何でアンタまでおめかししてんのよ！）

七分丈のTシャツから出た腕とか、広めにあいた襟元から覗く鎖骨から、直視できないくらいに色気が噴き出してる。

だらしなくならない程度に整えた髪が、風でふわふわ。

ピーカン晴れの太陽を受け、キラキラ銀色に光るそれを、無造作にかきあげて。

「……3分遅刻

あと2分遅かったら帰ってたな」

私に気付いてアイズブルーの瞳を細め、悪戯っぽくにやーっと笑った。

昨日の私の捨てぜりふを、しっかり覚えていたみたい。

「ははあ……さては寝坊か？
の割には、しっかりめかし込んで来たんじゃないの？」

茶化した口調で図星を突かれ、むくれる私。

「ふん、なるほど
オサゲをほどくところなるわけだ」

雑誌を見ながら何度も練習した、ゆるめの巻き髪。
鏡で念入りにチェックしたその毛先を、しのぶちゃんの指先が梳いて、つんつん引っ張って。

「すっげーかわいい……」

「ほんと!？」

「ぶ……っはははは！
反応早えっつの！」

「っ！ もお!！」

「マジで、よく似合ってる
ほら行こうぜ、もう随分並んでる」

私の返事も待たずにくるっとチケット売り場に向かうしのぶちゃんに、きゅっと右手をつかまえられた。

（わーっ、わーっっ、わーっっっ！

ほんとに、ホントにデートだあ……！！）

しのぶちゃんが見てないのをいいことに、私は顔全部で、100パーセント満面に笑った。

美術館は、とても混んでいた。

今日見に来たのは、有名なアニメ映画制作会社で、ずっと背景や自然を描いていた人の原画展。

もうすぐ展示終了ということもあって、どこに行っても長蛇の列。でも、ひとつひとつの作品を見ると、そんなのも忘れるくらいに引き込まれた。

はがきサイズの紙の中に描かれた月夜の森の絵なんてすごくて、まるで、小さな窓から別世界をのぞいているような気分になった。

すごいねー、綺麗だねー、って感動しながら振り向くと、同じくらい感動した顔で、しのぶちゃんが絵に見入っているから、それも嬉しくて。

「ふぁー、おもしろかった！」

「ああ、ホント」

「ふふ、しのぶちゃんったら画集まで買ってるし」

「いや、実は昔からあのシーン好きだよ」

「えへ、私も」

さつき絵葉書買ってきちゃった

……ね、しのぶちゃん楽しめた？」

「はは、意外にな

で、どうする？ そろそろメシにしないか？」

「あ、うん……ちょっと待って、トイレ」

「ゆっくりでいいぞ」

「バカ！違うわよ！」

お色直しに決まってんでしょ！！」

「はは……わかってるって

そうじゃなくて、混んでるだろうから、ってこと」

はーやれやれ、とでも言いそうな風情で壁に寄りかかり、人疲れした表情でしのぶちゃんがタバコをくわえる。

「だーめ、身体に悪いってば」

「いいだろ、一本だけ、な？」

ひよい、と口元からそれをむしり取ると、「一本だけ」と、私がどうしても弱いおねだり顔をしてくるから。

「こっちで我慢しなっ」

いつもながら、その顔がかわいいなんて思ってしまうのが少し悔しくて、めいっぱい背伸びして、しのぶちゃんの薄い唇に、自分のそれをかすめさせた。

唇が触れ合った瞬間、しのぶちゃんが湯気でも噴きそうな勢いで顔を真っ赤にしたのなんかほっといて、あとは一目散にトイレに直行。

「…っ」

「アハア☆ 見いゝちやった」

「！ おま……何でこんなトコにいんだよ！？」

「ウフン、何ででしょお？」

「とぼけんじゃねえ！ 何の用だ！」

「アンタに用なんかあるわけないデシヨ
デートよ、デ・エ・ト」

「ハッ、お天道様の下におめーがいるなんざ、これからヤリでも降
るんじゃないか？」

「アンタに言われたくないわよこの女の敵！
それより……アレが例のコ？

何さ、散々愚痴った割には順調そうじゃない」

「ケッ、うるせ」

「はーん……その表情からするに、まだ本懐は遂げてないってカンジ？
いいじゃない、早いとこやっちゃいなさいよ」

「バカヤロ、んな簡単にできつかよ……」

「あらあ……信じらんない、この台詞！
アンタってばホントに本気なのねえ！」

「だあからそう言ってっだろ前から！！
とつとと失せろ、^{ヒカリ}耀！」

おめーがいるとオトせるもんもオトせねえだろが！！」

「んゝまっ！ ヒドい言いようじゃないさ！
アタシはねえ、これだってアンタのこと心配して……」

「黙れ！ いいから消えろ！
アイツにこんなところ見ら……ああ帰ってきた！

ほら！アッチ行けアッチ！
チっ、触んな香水が移るだろが！」

「あっ、やん、もう！

わかったわよ、消えりゃいいンデシヨ！

でも約束は約束よ、史惟！

この夏の間にアンタがあのコをモノにできなかったら、アレはアタシがもらうからねっ！！」

「わあかった！わかってる！！

だあーもういいからオラあっち行け！！」

「はあ、やれやれ」

混んだトイレでどうにか場所を確保して、ヘアスタイルとマスカラだけのアイメイクを直してきた。
ぎゅうぎゅうの出入口から何とか脱出したときに見えたのは。

（！！ 何よ、あれ……！！）

私を待っているはずの人は、ど派手な金髪美女と戯れていた。
遠目にも、相手がかなり整った外見なのがわかる。

スレンダーな長身で、しのぶちゃんと同じくらい背が高い。

服もバッグもアクセサリーも、みんなオシャレですっごい高そう。

まるで、雑誌から抜け出てきたスーパーモデルみたい。
ショックで心臓がバクバクする。

そりゃあしのぶちゃんはそのビジュアルだし、人込みの中にひとり
でいれば、声をかけてくる人なんて一人や二人や三人や四人じゃす
まないことなんか、わかってる。

私みたいなちんちくりんのお子ちゃまなんて不釣り合いってことだ
って、わかってる。

だけど。

「……おう、もういいのか？」

「……………」

「何だ、どうした」

「あたし……帰る」

「……………ああ？」

「何よ……なによなによなお！」

せっかくのデートでまで違う美人といちゃいちゃして！」

「今の……見てた、のか？」

「そりゃああんたはモテるでしょうよ、言い寄る女なんていつものことでしょうよ！」

「……っ何で今日くらい私にひとりじめさせてくんないのよ!!」

悔しさに目の前がにじんでくる。

二日前から悩んだコーディネートも、朝5時から頑張った髪型もメイクも、もうどうでもよくなってきた。

「っ…しのぶちゃんなんか…大っ嫌い」

こんな情けない涙を見られたくなくて、慌てて後ろに振り返り、その場から離れた。

（バっカみたい…!!）

今までミュールなんて、履いたことない。

似合う自信なんてなかったけど、それでも、ちょっとしたでも可愛いって思われたくて選んだのに。

「ぐすっ、何で…こんな歩きにくいんだあっっ」

我慢していた靴ずれが、急に痛みを増したように思えた。
止まらない雫を雑に拭って、腹立ちまぎれにそれを脱ごうとしたとき。

「……」

「っ……さわんないで」

「待てよ」

「やつ、離し………！」

ミュールにかけた手を掴まれたと思ったら、振り払う間もなくむぎゅっと全身を拘束された。

「泣くなって」

「………」

「……ヒナ」

「……ぐす……も、やだ」

「……悪かった

でもよ、俺何度も言ってるだろ
俺とお前のもんだって」

「らっで…いづぼおっだどひどいっじよでいいどうじゃん
(だって…いつも女の人と一緒にいるじゃん)」

「それは……」

「おびぜやっでどうどぎぼぞうだじ、こっだのぼうやだあ
(お店やってる時もそうだし、こんなのもうやだあ!)」

「泣くなよ、なあヒナ泣くなって……」

ああも、どうしたらいいんだよ!

お前がいくら愛想つかそうと呆れようと、俺はお前じゃなきゃダメ
なんだよ!

いい加減わかってくれよ……」

「うゝ、うゝえゝゝん……」

泣き止ませ方のわからないしのぶちゃんが、私を抱きしめながら何
度も強く背中をさする。

優しくされればされる程、涙も鼻水もとまらない。

気付いてしまったのだ。

しのぶちゃんが他の女の人といるのを見て、こんなに悲しくなるの
は何でなのか。

ガラでもないのに、ちょっとでも可愛くなるよう頑張ってしまった
のは、どうしてか。

さっきの光景を見て、わかってしまった。

お店に入り浸るのも、ぐだくだつまらないことを喋ってしまうのも、「おごってくれるから」とか、「しのぶちゃんが相手してくれるから」じゃない。

私が少しでも長く、しのぶちゃんと一緒にいたいからだ。
私がどんな短い間でも、しのぶちゃんのそばにいたいからだ。

それは、つまり……

—ぐく……ぐきゅる

「ひっく……ずっ、ずずっ、おだがずいだ（お腹すいた）」

「あ？どした、腹減ったのか？」

ああ、今すぐ何か美味しいもん食わしてやるから
もう泣くな、な？」

「ぐず……うん」

心の中で形を成してしまったそれを認めるのが怖くて、偶然鳴ってしまったお腹の虫でごまかす。
めっちゃめっちゃマヌケな展開なのに、しのぶちゃんてば焦りすぎて気付いてない。

こんなイイオトコが、私みたいな小娘が泣くだけで慌てふためいて、眉にシワ寄せて、むちゃくちゃ困った顔をして。

「……………ぷっ」

「あ？ 何だ、どうした？」

「ふ、ふふふ……………」

すん…なんでもないっ…………ゴハン、たべる」

「機嫌、直してくれるか？」

「……………」

「今言ったのは、みんな本当だ
嘘じゃねえ、俺あこんなだけど、そばにいたいのも、居てほしいのも、いつだってお前だけだ」

鼻をすすりながら頷くと、額に唇を押し付けてくる。

「信じろよ、マジなんだからな」

ほんとにホントに切ない声音で、私にほっぺを擦り寄せながらしのぶちゃんが言う。

私は黙って目を閉じる。

「……………さて、メシ食い行くか
何にする？ リクエストないか？」

「え、と……………オムライス、かな」

「お、いいじゃねえの
近くに美味しい洋食屋があるから、そこにしようぜ」

「ん……………行く」

私がぎこちなくも笑い顔を作れば、しのぶちゃんもホッとしたように顔を綻ばす。
恥ずかしがりながら右手を差し出せば、あのふあふあの笑顔を浮かべてちゃんとつかまえてくれる。

さっきまで痛かった胸が、その分だけぽわ、とあったかくなるのがわかった。

ープルルルル、プルルルル………プチッ

『チャオ☆ 珍しいじゃない、アンタからアタシに電話してくるなんて

ね、今日はあの後どうなったのよお?』

「オイ、耀ィ?

てんめーよっつくも余計な真似しやがったな!」

『アラ、その調子じゃあんまり芳しくなさそおね』

「芳しくねえどころじゃねーよっ!!」

大っ変だったんだかな!

テメーのせいでヒナコ泣かしちまっただろーがっ!!」

『……フン、カワイイお嬢チャンを泣かせるなんて、アンタも腕が落ちたもんねえ』

「っざけんな、腕もクソもあるかよ」

『あらあ? 大口叩いた癖に、そんなんで大丈夫なわけ???』

「うっせ!

テメーこそどうなんだよ!!」

『アンタにわざわざ教えてあげる義理はないわね』

「くっそ……上々ってことか」

『ご想像にオマカセするわ☆

今日も言っただけど……わかってるわよね？

8月中にオトせないならアレ、アタシがもらうから』

「黙れ、テメーなんぞにやってたまるかよ」

『あっそお……ギリギリになって泣き言言ったって知らないわよ』

「へ……っ、そりゃこっちの台詞だ

おめーにだけは絶っつ対渡さねえかな！」

『フン……いつまでその勢いが続くことやら

ま、せいぜい頑張ってチョーダイ

じゃ〜ね〜☆』

プツッ…プーツ、プーツ、プーツ……

「……………チッ」

LESSON 7. 衝撃の真実!! (前編) (前書き)

しのぶちゃんの後ろに見え隠れする美女の影。
彼女は一体……？

今回もヒナコ視点です。

LESSON 7. 衝撃の真実!! (前編)

― 今日…ありがとう

― 家まで、送らなくていいか？

― ん、近いから大丈夫

― そ、か……気をつけろよ

― うん、じゃ……

― あ……

― ？ なに？

― ま、た…行きたいところあったら、言え

― ……へ？

― デート……したいだろ

― っ……うん！

― バカ、んな顔すんな……

― しのぶちゃん……んう……っ

「~~~~ハア、ん♪」

「……井田、矢井田、オイ矢井田ってば！」

「…ハッ！ え、あ、何？？」

「プリント、はい」

「あ、ご、ゴメン」

先週のデートのことを思い出してバカになってる私を現実に引き戻したのは、隣の席の麻宮君。

とはいえ、一昨日の席替えで隣になった彼もまた、ジューブン妄想の世界の産物みたい。

生徒会長で、理事長の息子。

アラブ系人種のクォーターで、浅黒い肌とくりくりパーマヘアに大きな瞳。

美貌のマハラジャみたいな容姿は、学園ぶっちぎりNo. 1。

これで成績トップクラスってんだから、まるっきり少女マンガのキャラクターだ。

「……お前、絶対それ幸せボケだよな」

「え、ええ！？　そ、そんなじゃないよ！」

「嘘つけ、顔に『何でわかるの！？』って書いてある」

「う、あ、えっと……」

「なあ……それって、やっぱりアイツ？」

実は麻宮くんは、しのぶちゃんと私の接点を知っている。

以前、私を迎えに校門まで来ていたしのぶちゃんを、現国の先生がナンパしているのを、影で私と一緒に見ていたのが彼。

麻宮君が私に何か言おうとしたとき、私は思っししのぶちゃんに拉致されてしまい。

「う、ん……」

「……そっか」

「……あ、ねえ

そういえばあの時、麻宮くん何か私に言おうとしてたよね」

「あ……ああ

アイツと知り合いなのか、って聞こうとしたんだ」

そこで、麻宮君は少し黙って。

「あのさ…

気い悪くしないで欲しいんだけど、俺アイツはやめといた方がいいと思う」

「え……な、んで？」

「俺さ、姉貴がやってる店でバイトしてるんだけど、アイツよく店に来るんだ

どっかで見たことあると思ってたから、覚えてたんだけど……いつも女連れだぜ」

頭の中が、真っ白になる。

「……え」

「それもさ、いかにも金持ちっぽい女金髪で、やったらハデで……そう

なんか雑誌から抜け出てきたみたいな感じの」

咄嗟に浮かぶ、このあいだのデートでしのぶちゃんが話していた人。

（やだ…ウソ、だよね……）

「向こうは手馴れてるっぽいからさ、お前、適当に遊ばれてるんじゃないかと思って

男のオレが言うのもアレだけど、ああいうやつって、気をつけた方がいいんじゃないか？」

不安が、黒い雲みたいに広がって。

「……」

「……ああ？　なんだ来ねえのか？」

「う、ん……ちょっと、テスト点が悪くて

「何だ、追試かあ？
しょーがねえな」

「ごめ、ん……」

「で？　明日は来れんのか？」

「あ……う、ん

「そっかー……」

ま、気が向いたら来いや
お前の好きなもん、なんかまた用意しとく」

—……しのぶ、ちゃん

「…ああ？　なんだ？」

—………うう、ん　なんでもない

「どうした？　何かあったのか？」

—あ、や、違うの、なんでもない
…じゃ、また

「おう、待ってっぞ」

—プツッ

「…あら、今日は来ないんだって？」

「追試だよ」

「聞こえてた」

「……」

「……ぶっ、ブフツ、やだ何その顔！
もしかしてアンタ、寂しいんだ？」

「うっせ黙れ悪趣味ヤロー……」

「どーもアリガト☆

アンタなんかはこの美的センスがわかるもんですか………ってちよつとちよつと！

そのタルトどーするつもりよ！！」

「食う」

「~~~~っ、あーのーね！！」

アンタ一人でホール丸ごとひとつ食べようってワケ！？」

「…欲しいのか」

「そおねえ……アンタがどうしても、ってんなら、味見してあげてもいいけど？」

「やらん、おめーにだけはやらん」

「うんにゃ、勝手に食ってやる」

「あっ！ バカ、こんのやろ……っ」

「ちよっ、いーじゃない一口ぐらいくれたって！」

「コレはヒナのために作ったんだよ！

誰がテメーみてえな味オンチに……っ」

「誰が味オンチよっ！

この耀サマをふんづかまえて味オンチですってえ……！！！」

「おめーケーキだろうが何だろーが、どのスイーツ食っても『甘い』しか言わねーだろーが!!」

「甘いもん『甘い』って言って何が悪いのよっっ」

「……っ」

しのぶちゃんのお店、『SILENT』の窓の向こう。
私がいるのは、お店の影。

この角度からは、カウンターにいるしのぶちゃんが見える。
看板は『CLOSED』なのに、カウンターにはお客さんが一人。

こないだのデートのときに、しのぶちゃんが喋っていた女の人。

—金髪で、やったらハデで……そう

なんか雑誌から抜け出てきたみたいな感じの

通話を切ったケータイをにぎりしめる手が、じわじわ汗ばんでくる。
しのぶちゃんは、なんだかその人と親しげにしている様子。
少なくとも、昨日今日に知り合ったような感じじゃない。

だってしのぶちゃんは、あれで案外人見知り。

浅い付き合いの相手には、ダルそうで面倒臭そうで、静かに不機嫌以外の表情なんて、あんまり見せない。

なのに。

「……っ、ばかぁ…！」

「っちょ、一口よこしなさいったら……！
アンタ知ってるでしょ、アタシがフルーツとカスタードクリーム
タルト好きなの！」

「だから余計におめーにはやらねつつってんだ！」

「あっ、ひっどーい！
いいじゃないたまにはおごってくれても！
知らない仲じゃないんだから……！」

「俺あ俺より稼ぎのいいヤツにおごる趣味あねーんだよっ…！」

「何よそれ！
そんなんだからいつまで経っても……ってちよつと！
アレあんたのお嬢ちゃんじゃない？」

「ハッ！ んな原始的なテに引っ掛かるか…！」

「ホントだってあそこ、ほら！」

……ね、なんか様子ヘンじゃな……あらま、いない」

二人のやり取りを見ていると、胸の奥がぐうっと痛くなる。

まるで、誰かに心臓を握り締められているみたい。

こんなのいつまでも見ていたくなんてないのに、固まったみたいに足が動かなくて。

そうしているうちに、窓の向こうの世界からしのぶちゃんが消えた。胸の痛みと辛さを持て余していた私は、それに気付くのに時間がかって。

「お、おう……追試、済んだのか」

気がついたときには、窓の向こうに見ていたひとが、目の前にいた。

やだ、こんなの。

いつも通りを装ってても、しのぶちゃん、完全に目が泳いでる。

その動揺が、麻宮君の推測を裏付けているみたいで。

「あ……っ、おい待てよ！」

困惑したようなアイスブルーの瞳と視線ががちあった瞬間、私はしのぶちゃんに背を向けて駆け出していた。

「アラ、間に合ったのよかったじゃない」

「っ誰のせいだと思っ……あー！
てンめ勝手に……！」

「んー、やっぱり甘いわね
ごちそーサマ♪」

「口に合わなきゃ食うなっ！」

「何で怒るのよ、マズイとは言っていないじゃない
そこいくと……まあ、美味って言えないこともないわ」

「ケツ、そりゃーどーもありがとーござーやすっ
タダ食いの癖にエラそーに」

「あはん☆」

「……」

結局、私の逃走劇はあっさり失敗。

「だりー」と「めんどー」が口癖の癖に、なんであんな足が早いんだ。

手首を引っつかまれお店に引っ張り込まれ、カウンターの、いつもの指定席に座らされる。

途端に始まる、しのぶちゃんと美女との軽妙なやり取り。

どう考えたって親しげとしか言いようのない会話の一つ一つが、辛くてたまらない。

こんなの見せ付けて、しのぶちゃんは一体何がしたいんだろう。

「……折角だ、何か食ってけな？」

「……いらない」

「そう言うなって、ほら、こないだのリクエスト」

「美味しかったわよ♪」

綺麗に皿に盛られて出てくるタルトには、ふんだんにフルーツとカスタードクリームが乗っかっている。
見るからに美味しそう、だけど。

「もう、いい……」

うんざりしてスツールから降りようとする、カウンター越しに手を取られる。

「ヒ、ナ！ 待てって、誤解だ」

「……っ、このどこが誤解なのよ！

私に何だかんだって調子いいこと言って！

こんな綺麗な人といちゃいちゃしてさ！！

やっぱりあんた、ただの女ったらしじゃない！！」

「……ぶふ、っ」

「違っ、おいヒナ！」

「もう知らない！

ヒトの気持ち弄んで、オモチャにして！！

さぞかし面白かったでしょうよ、あたしが……っ」

我慢できない涙が、大きな粒になってぽたぽた。

手の甲にいくつも落ちる感覚に、私をひきとめるしのぶちゃんの力が緩む。

その隙を狙って、手を引き抜く。

「あんたなんか……っ

あんたなんか、好きになんなきゃよかった！

わかってたもん！

どうせ遊ばれてるだけだって！
からかって楽しんでるだけだって！！
バカ！ 人でなし！ スケベ！
あたしの初恋返してよ！！」

拭うそばからびちゃびちゃに濡れていく頬。
辛くて悲しくて、叫ぶような言葉が止まらない。

しのぶちゃんは思考が完全に停止してしまっているのか、待っても待っても、反論の言葉が出てこない。
続く沈黙のせいで、自分が喚き散らした事が現実なんだと思い知らされる。

一弁解の余地、ないんだ……！

もう耐えられなくて、スツールから腰を浮かせた、その時。

「ぷっ…ぷふっ、ぶふふ……っあゝゝもダメっ！
ははっ、あはははははっ！
ひやはは、あははははははっ！」

「！ てんめ、笑い事じゃねーだろーが！！」

「ぶふ、うくく……っ、だってアンタ、これが笑わずにいられる！？バカねえ史惟、なんでちゃんとアタシのこと話しておかないのよ！」

カウンターに突っ伏したゴージャス美女が、豪快に笑う。
笑いすぎで涙のにじむ目で、あっけにとられる私に向き直って。

「んふ、くくく……っ

大丈夫よヒナコちゃん、アタシはね、アナタが思ってるようなんじゃないの」

「え……何で、私の名前……」

「……ほら史惟、そろそろ腹括んなさい」

「……」

「何黙ってんの！

こーゆーときこそビシッとキメンのが男でしょうが」

「……っ！ おめーに言われたかねーよ！

大体誰のせいでこうなったと思ってる！

それに……っ何て言えってんだ……」

「あん、そのまーんま言えばいいんじゃない」

怒りと苛立ちと困惑と、それからもうひとつの何かの感情に振り回されるしのぶちゃんから、視線を移す。

澄まし顔でぐびっとコーヒーを飲むその人は、まさに完璧な美貌。蜂蜜色のゴージャスな金髪、手入れの行き届いた白い肌、何とも言えない艶のある、少し目尻の下がった、澄んだ青い瞳。

—あ、れ……………？

想像してみる。

目の前にいる美女のお化粧を取って、男モノの服着せて、髪短くして……

「あ、の…もしかして……………？」

似ているのだ、しのぶちゃんに。

「お、姉さ、ん……………？」

「……………ンフフ☆」

意味深な笑みに確信を強めたときにお店に響く、力無いしのぶちゃんの笑い声。

「は、はは……アネキ、か……
そうだよな、普通……」

「？　しのぶちゃん……？」

声では笑ってるけど、しのぶちゃんてば泣きそうな顔してる。視線はゆらゆら、足元ふらふら。

「違うんだ……ヒナ……違う……」

そうしてゆるゆると、首を横に振って見せ。

「アネキじゃねえ……」

コイツは……っコイツは俺のお姉さんなんかじゃねえ！

……っ『お兄さん』、だ……っ！」

言い切ると同時にがつんと額をぶつけ、文字にできないような妙な

うめきをあげて、しのぶちゃんはカウンターにくずおれた。

LESSON 8. 衝撃の真実!! (後編) (前書き)

「姉貴」じゃなくて

「兄貴」だあ!?

明かされる、衝撃（笑撃?）の真実。

本編最終回です。

LESSON 8. 衝撃の真実!! (後編)

「は……お兄、さん？」

「ヒカリ耀、身分証」

「ほい」

目を見開いてフリーズしている私に、「お兄さん」呼ばわりされた美女はぽいっと保険証と車の免許証を渡してくる。

免許証に印刷された顔写真はスッピン。

中性的ではあるけど、頭の中でイメージしたよりも、ずっとしのぶちゃんに似ていて。

クロサワヒカリ
黒沢耀

19xx年 12月 5日生

性別 男

「うそお……」

ひどいよ神様。

なんで、なんでこんなウツクシイのに、バッチリ「♂」なんですか。

「シフ、安心した？」

「……だから言いたくなかったんだよ
双子の兄貴がカマなんてよお……」

「ふた、双子！？ おっおカマあ！！？」

会話について行けず、バカみたいに単語を繰り返しては免許証と保険証を見直す私に、しのぶちゃんの「お兄さん」は艶やかに笑う。
その間もしのぶちゃんは、カウンターに突っ伏したままいいじけるように頭をぐりぐり。

「あら失礼ね！ 誰がおカマよ！」

「そいだけバッチリ女装してりゃどっからどう見たってカマだろう
がこの変態！！」

「誰がカマで変態よっ！！」

知ってるでしょ、アタシはれっきとしたストレート！

ま、何なら証明してあげてもいいけど？

……ねえ、ヒナコちゃん☆」

「うあつ、あのちよっとっ」

「~~~~っ！ ヒトの女に手え出すな！
真耶^{マヤ}にバラすぞ！！」

隣のスツールに座る私の肩を馴れ馴れしく抱き寄せた耀さんは、しのぶちゃんのその一言であっさり手を引っ込めた。

「おお、こわこわ

こっちに手出しされちゃ困るし、邪魔者はそろそろ退散しましょ」

「おーおー、とっとと帰りやがれ悪趣味ヤローが！」

「ハイハイわかってますってば
ちゃんと仲直りしなさいよ」

「余計な世話だっ」

「あっそ

これ置いてってあげようと思ったんだけど……いらないわけね」

きれいにネイルアートの施された指に引っかかっているのは、どこかの鍵。

ぷらぷら目の前で揺れるそれを、しのぶちゃんがぶん取る。

「あゝあ……初お泊まりデートはあそこにしようと思ってたんだけどなあ」

「あにが初お泊りだっ
おめーらイマサラだろうが」

「ンフ、まあね♪
じゃ、ゴチソーサマ」

「……おい、マジでいいのか」

「奪取しといて何言ってるんだか
クリーニングは済んでるから、いつでも使えるわよ
ま……この貸しは高くつく、かな？」

「……」

「あはア、頑張んなさいよイロオトコ！
さて……ちよっとつ、いつまでヒトの身分証明にぎりしめてんのお嬢ちゃん」

「あ……すみませ」

「ま、そーゆーことだから
簡単に見放さないでやって、ヒナコちゃん
このコの片思い、アナタが思ってるよりだいぶ長いわよ」

「っ、耀ー!!」

「は……片思い？」

「ま、詳しくは本人に聞いてちょうだい
じゃあね☆」

テンポの良すぎる応酬と、完全にノックアウト状態という、見た事
ないしのぶちゃんに圧倒されてる私にひらひら手を振って、『お兄
さん』は店を出ていった。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………口あいてる」

「！」

地の底を這うような声に振り返れば、盛大な溜息をつきながら頭を
掻きむしるしのぶちゃん。

「で……………何から聞きたい？」

「何から、って」

「うあちよい待ち、一杯飲ませてくれ
シラフじゃやってらんね」

棚から見るからにきつそうなお酒を引っ張り出して、蓋を開けてぐ
いっとラッパ飲み。

カウンターに上体を預けて、奇妙な呻きを何度か。

何から聞きたいって聞かれても、私だって何が何だか。

「……お前、覚えてるかあ」

「……何を」

「ほら、福引きの話

去年の……夏休み、くらいか」

「あ、特賞当てた話？」

「すげえブーたれてたろ、おいてきぼりにされてよ」

「……あ」

言われて遡る記憶は、去年の終業式の後。

しのぶちゃんに『テゴメ』宣言されるよりも、ずっと前。

たしか成績も模試の結果も芳しくなくて、すんごい仏頂面を決め込
んでいたような。

『福引き？』

何当てたんだ、特賞か？』

『そおよ』

ハワイ2週間の旅、ペア2名様ご招待☆

おーめーでとーございまーすチャリンチャリン！！ってね、ハハ
っ』

『マジか！？すげえなお前』

『でっしょお？なのにママったら、』

『ヒナコちゃん一緒に行く相手なんかいないでしょ？』

どうせふたりっきりなら私、暁さん（あきさん）とがいいな』
だって！』

『暁さん？』

『ああ、うちのパパ』

『へー、仲のよろしいこと』

『やだよもうイトシしてさ』

娘のお手柄横取りしてウハウハよ
旅行から帰って来たら妊娠しましたとか言いそうな勢いだし』

『ははは、そりゃまた』

『まったくもう、功労者だったのに年頃の乙女が陰気に留守番ですよ……模試の結果も最悪だし』

『あーまあ仕方ねえわな』

志望校、結構イイトコなんだろう？』

『そーだけどー……私だってバカンスしたいっつの』

美形のカレシ連れてさっ、新しい水着買ってさっ、南国フルーツがぶすぶす刺さったカクテルで乾杯して……
ぬあゝもお夏季講習のバキヤロウ！』

『ははははは、バキヤロウってか』

『H A H A H A、じゃないよもう！
オカワリっ』

「……お前の顔見ながらよ、思ったわけ

美形のカレシとバカンスか、どんな奴だ、って

そしたら急に……いてもたってもいられなくなってよ

んで思い出したわけだ、避暑地に叔父貴が好きにしていって言っ
てた別荘があったの

近くに綺麗な湖があって、空気が澄んでてな

周りの林ん中の散歩道は、いつも涼しくて気持ちよくてよ

まだ落としてもいねえのに、連れてってやったら喜ぶかな、何食わ
してやろうか、なんて、考えだしたら止まなくて」

見る間に空になり、ゴロンと転がされた大きな空瓶には、『VODKA』と書いてある。

『ヴォドカ』……いや、『ボカ』かな。

読めないから何だかわかんないけど、絶対キツイやつだ。次に手を付けた瓶には、『TEQUILA』のラベルが。

これは私でもわかる。

『テキーラ』だ。

「ちょっと……大丈夫なの？」

「あ？ あんだこれ、全然酔えねーな」

私の言葉なんて耳に入らない様子で、しのぶちゃんはぐいぐい瓶をあけていく。

「で、鍵はアイツが持ってるから聞いたわけだ
叔父貴の別荘どうなってる、って

そしたら仕事で使う道具の倉庫がわりにしてて、大して使ってない
っつーだろ？

だから言ったんだよ、んな勿体ねえことするなら俺によこせて」

しのぶちゃんの話が一息するたびに、瓶の中のお酒がガンガン減って。

「まったく、最初あアイツ『いーわよ、そんなにたいしたもんないし』なんて言ってた癖によお
急ぐに、『掃除してみたら思いの外素敵でさあ』だど」

「ちょっと飲み過ぎだつて」

「『いーじゃなあい、アンタ一生本命なんてできないんだから最近のラブホもすてたもんじゃないわよ』だとお！？
ふっざっけんなパツキン悪趣味カマ男！
俺がいつからアイツに惚れてたと思ってる！！」

「しのぶ、ちゃん」

「アイツは……アイツは他のスレたよーな奴らとは違うんだよ！
適当に遊んで、やることやってはいさようなら、なんてできると思
うか！？

初恋もまだなんだぞ！

それを……可哀相じゃねえか、そんな」

「……」

「『アンタそういうの得意じゃない、頑張んなさいな
でも、夏までに落とせなかったら、別荘はアタシが貰うから』
なんて、勝手抜かしやがる……
しらねーよ、あんな……あんな可愛い奴落とす方法があるなら俺が
聞きてえっつの」

高そうなお酒をハイペースで飲みながら、しのぶちゃんはどんどん
自分の世界に入っていく。

独白のようなその話には、つつこみどころが山のよう。

カウンターを回りこんで近付くと、もうそれだけでもんのすごいお酒臭い。

「……そんな前、から？」

「はは……可笑しいだろ？」

一回り近くも年下のガキに振り回されて、誰と寝ようが何しようが、頭っから離れねえの」

自嘲気味な瞳は、酷く真摯で、淋しげ。

傍に寄って来た私のおさげを引っ張って、前髪をくしゃくしゃ。

「そのくせ、当の本人目の前にすると、何も上手くいきゃしねえ
すぐ泣かしちまったり、怒らせたり

……惚れた女の機嫌ひとつ取れないんだぜ？」

「……そんなこと、ないよ」

「バカだろ、今だって酒の力でも無けりゃ、お前に話す勇氣も出ねえんだ」

「しのぶ、ちゃん」

「はあ……カッコ悪いよな、俺
歳くってるばっかだよ」

「そんなことないってば」

ぐいぐいシャツの裾を引っ張る。

優しい手つきで、両方のほっぺを撫でられる。

何で私が泣きそうになってんだろ。

言いたい言葉がいっぱいあるのに、どれもみんな正しくない気がして。

どうしていいかわからないまま、ぎゅうつとしのぶちゃんにしがみついた。

お酒の瓶をゴトンと手放して、しのぶちゃんが私の肩に顔を埋める。

「お前……俺が誘ったら来るか？ 別荘」

「……ん」

「わかってんのか？」

「タダじゃすまねえんだぞ」

「……一年も前から連れ込む気だったくせに」

「……」

「『遠慮なくテゴメにさせてもらおうわ』なんて言っちゃってさ何もたもたしてんのよ」

「…仕方ねえだろ、お前が……っ」

「何よ、私が何なわけ」

可愛いげのないことばかり言ってるけど、私の両腕はしっかりしのぶちゃんに巻き付いている。

お酒臭さなんてほっというて、かたい胸板に顔を擦り付ける。

「……連れてってよ

湖の近くで、綺麗ないいところなんでしょう？」

「…ヒナ」

「しのぶちゃんが作ってくれるならパスタがいいな
ジェノベーゼと、生ハムのサラダもね

食べ終わったらお散歩 ちゃんと日焼け止め持って行くよ」

目だけで上向けば、やるせない表情のしのぶちゃん。

「今度の模試、頑張ってくる

もうすぐ夏休みだから、はやく宿題片付けて、一緒に行こう
ちゃんとお泊まりできるように、パパとママにお願いするよ」

「……もう、離してやれねえぞ？」

嬉しさと恥ずかしさがごたまぜの気持ちのまま笑うと、力が抜けたようにしのぶちゃんがしがみこむ。

つられて私も座り込む、腹が立つほど長い、しのぶちゃんの脚のあいだ。

「ホントに……敵わねえよ、お前には」

「ふふふ」

「後悔、すんなよ？」

「……頑張んなさいよ、後悔させないように」

「はは……だな」

よく見せる不敵そうなやつでも、困ったようなそれとも違う、ただただ明るく綺麗な笑みで、しのぶちゃんは私の唇を塞いだ。

「好きだぜ、ヒナ」

「私も」

「あ……：そーういやまだ言ってないことがある」

「なあに？」

「昔の女が乗り込んで来てモメたことあったろ？
あん時、実はお前のハダカ見え……」

「ベチン！

「バカ、エッチ！！」

EXTRA::半獣ダーリン　く黒沢史惟の場合く（前書き）

パラレル番外編。

しのぶちゃんが、もしも半人半獣だったら。

ヒナコとしのぶちゃん、視点が交互に切り替わります。

EXTRA：半獣ダーリン　（黒沢史惟の場合）

「……でね、私、意を決してそのドア開けたわけよ
いくらオトコ勝りだからって、男子トイレなんて今まで入ったこと
ないんだよ!？」

中に誰かいたらどうしようってさあ、もうそっちの方が怖かったわ」

「…で？　開けてみたら？」

私はゆっくりと、首を横に振る。

「……いなかったの、誰も

そのかわりにね、便器のフタ…あ、そこ洋式トイレでさ…そのフタ
に、友達の貸したハンカチだけ、置いてあったわけ」

「………」

「びびったわよそりゃー！

そんで後からペンションのオーナーさんに聞いたわけ
何でもオーナーさんご夫婦には、小さい頃に亡くなったお子さんが
いたんだって」

「………」

「……名前は『アカリ』ちゃんだったってさ」

「……ほお」

「あーもう、あん時は怖かったあゝ
生きて帰れないかと思ったもん……」

恐怖に身を竦める仕種をしつつ、私はクールなマスターの様子をチラ見。

「……フン」

「ぶー！ コレもダメかい……」

んもー、さっきから反応薄いよマスターったらあ」

一生懸命にコワイ話をする私に対して、店のマスターはととてもとてもクール。

何で私がこんなに躍起になっているかというと、マスターでさえビビるような怖い話ができたら、彼の「名前」を教えてくださいというのだ。

ここは私の行きつけのお店、『SILENT』。

相手をしてくれているのは大変に見目麗しい、お店のマスター。

バスケットボール選手並の長身と体躯に、ワールドさ際立つ浅黒い肌。

若干前髪の長いぼさぼさの髪は綺麗な銀髪で、ごく薄いブルーの瞳

が時折見え隠れ。

男性美を極めたような彼の動作はどこか気怠げなのに、それすら彼の魅力を際立たせていて。

正直、苦手なタイプ。

整いすぎてて、いつそ危険。
てか胡散臭すぎ。

時々、やたら露出の高い服装のオネエちゃんたちが来てたりするし。

「ねーもう何で名前教えてくんないのおー？
いーじゃん教えてよおー、ねーえー」

「名前なんか知らなきゃ知らないで何とかなるだろう？
お前もこだわるなあ……！
ははあ、何？ 俺のこと口説こうってか？」

「ケッ……始まりましたよタラシ野郎の戯れ事」

「あ、そ
ミルクティーお代わり注いでやろうと思ったんだけど、いらねってか
あーそーですか」

「ああーん！ 嘘ウソー！
マスター超カッコイイ☆
んも超ーめろめろー……？」

「何で語尾が疑問形……
ほらグラス寄越せ」

「あ〜り〜が〜と〜♪
ねね、オゴリ？　ねえオゴリ？」

「へ……っ」

ガキから金巻き上げるほど落ちぶれちゃいねえよ」

「……どうせお子ちゃまですよーだっ」

そのくせ何故か私に好意的。
今も、こんな言葉でごまかしながらも、ミルクティーのお代わりを
いれてくれて。

「何さ、『俺がビビるような話ができるならな』なんて言っちゃっ
てさ

最初からこっちに勝ち目ないんじゃないん！」

「へっ……ようやく分かったか」

「ちえっ……私のおきだったのに」

「まあそうムクれんなって
ワビでもねえけど、かわりに……」

「！　教えてくれんの！？

マスターの名前！」

「……コレキヨ惟清」

「こ、コレ……」

そりゃまた、古風な……」

「その頃な、親父が時代モノにハマってたらしい
家族みんなに猛反対されて、諦めたらしいがな」

「ふうん、そりゃ危ないとこだったのねえ……ってちよつとつっ！
それってマスターの名前じゃないってことじゃん！！」

「はは、バレたか」

「んもー！」

コドモだと思ってバカにしてええー！！」

訂正。

お子ちゃまからかって楽しんでやる、いけ好かないヤロウだ。

「……そういや、散々怪談話した割には『半獣』ネタあなかったな」

「へえっ？」

ぷは、と空調に向かい紫煙を吐き出しながら、マスターが言う。

『半獣』とは、最近テレビとかの特番でクローズされている存在で、曰く、半分が人間で、半分が獣っていう人種なんだとか。

普段は普通の人間と変わらないけど、ある特定の条件下では、獣に変身してしまったり、他にも特異な変化が起こったりしてしまう。

どのように変化するのか、どんな動物（この動物は『守護獣』と呼ばれている）に変身するのかは、人により様々。

彼らは他人に自分の正体を明かす事なく、人に紛れてひっそり生きている……とは、一昨日見た番組の怪しげなナレーションの受け売り。

「は、半獣って……まさかマスター、あんなモン信じてるわけ!？」

「へえ……現実的な発言だな

オバケだ幽霊だなんての信じてるくせに?」

「だあって!」

幽霊はともかく、半獣って!？」

『人間』が、『獣』に、『変身』するってんだよ!!!？」

そーんな仮面ラ○ダーじゃあるまいし!」

「信じろって方が無理だったか?

ああ……?」

「だってそうでしょ?

普通ありえ、な………う、うにやむにや」

「ん?」

「あ、あうう……」

言いながら、マスターはカウンター越しに、上から覗き込むように見つめてくる。

ばさばさふりかかる前髪の向こうから、アイスブルーがきらきら。

くそう、くそう！

何だその笑みは！

何なんだそのフェロモンは！！

「……会わせてやろうか？」

「……え？」

「半獣

さすがに本物見たら信じるだろ？」

「だ…っ、えっ、本物って、」

「次の満月は……二週間後か

会ってみたけりゃここに来るといい

夜、月が出る頃な」

「ちょ、え、本物ってどこに！？」

「ま、詳細は見てのお楽しみ？」

「……」

「もちろん、無理にとは言わねえぜ？
あくまで興味があるなら、ってコト」

ふは、と、キマった仕種で煙草を吸うその雰囲気は、どこからどう
見ても私をからかっているとしか思えなかった。

「もしもし、ママ？」

私……うん、もう部活終わり

でさ、この後なんだけど……うん、うんまだ調べたいことあって
ゴハン……うん、大丈夫

調べ物済んだら、また電話する……うん

気をつける……うん、はい……はい、じゃあ後でねー」

ーぷち

「……おっし」

連絡、オツケー。
月、バツチリ。

「っはー……ん、よし………？」

……もっかい深呼吸しとこ

すーっ、はーっ……」

あの日から二週間。

私は今、『SILENT』の出入口に立っている。

昼間はカフェ、夜はバーとして（不定期）営業しているはずなのに、今は『CLOSED』の看板がかかって、店内も明かりが落とされている。

—うう、このドアの向こうに……

「！ あんなの、冗談に決まってるじゃない！

何びびってんの、私！！」

ドアのレバーに手をかける勇気の出ない自分を奮い立たす。

今夜は満月。

星もない。

半獣なんてバケモノが現れるには、まさにうってつ、け……の……。

「~~~~っっ！

ばっ、バツカじゃない！？

あっ、あんなのデタラメだってば！

いつもみたいにおちよくられただけ！

だからちよっと……ちよっと、確かめるだけよ……！」

度胸とか、肝っ玉とか、ど根性だとか、とにかくそういうのをむちやくちやにかき集めて、出入口のレバーを掴む。

「~~~~~っ（こ、怖いよお~~~~）」

急速に沸き上がる恐怖に、ぎゅうつと目を閉じた、その時。

「!! ひぎゃああああっ!!!!」

突然、ドアが内側から開いたのだ。

手を離すこともできず、およそ乙女らしからぬ絶叫とともに、内開きの動きに引きずられ店内に転がり込む。

「わああああ神様仏さま去年亡くなったひいじいちゃん助けてー!!」

「……何してんだお前」

「へ……………あ、えっ? ! ま、マスター……」

「へえ、来たか……案外度胸あんな」

硬直した身体で必死に祈る私を、ジーパンに開襟シャツを羽織った

マスターが、髪を拭き拭き私を見下ろしていた。

「入れよ、寒かったろ？」

「……………」

「いつまでンなとこで丸まってるつもりだ？
ほら、来いって」

両脇を支えられてようやく立ち上がり、引っ張り込まれる店内。
指定席のカウンターに座らされ、間もなく差し出されたのは、ほわ
ほわ湯気の立つマグカップ。

「飲めよ 作っという言うのもナンだけどな、美味えぞ、それ」

そう言うマスターの手にも、私に出したのと同じマグカップ。
甘く濃厚な香りの正体は……………あ、チョコレート？

これ、もしかしてホットチョコレート？

「…………マスターも甘いもの、食べたりするんだ…………？」

「どちらかと言えば甘党……………か？
ほら、冷めちまう前に飲んでみろって
熱いうちが美味えんだから」

「ん、いただきます

………！ んん~~~~っ！！」

「ははあ、な？ 美味えだろ？」

「すーっごい美味しい！！

こんなの初めて飲んだ！

え、これメニューにあったっけ！？」

「いんや、これは裏メニュー

……でもねえな

基本、客のわがままあ聞かねえし」

とろりと滑らかな舌触りに、鼻腔を抜けるこっくりとしたカカオの香り。

冷えきっていた身体にしみて、からっぽだったお腹の中がぽわぁつと暖かくなる。

あまりの美味しさに一口したときから止まらなくなって、あっという間にカップは空になってしまった。

「んんーおーいしかったーあ！！

ねね、オカワリないの？

もちよつと飲みたあい！！」

「残念だが材料切らしててな、悪いがそれでオワリだ

……ああわかった、んな顔すんな

おら、カップ出せ」

オカワリ無しとの返事に、あからさまにがっかりする私のマグカップに、マスターは自分の持っているマグカップの中身を半分こ。

その行為に驚いた私は、しばし言葉を失ってしまつて。

「……」

「？ 何だ……あ、飲みかけはアレだったか？
いいだろ、無いよりマシってことで勘弁しろって、な？」

「ううん……」

あの、ありがとう…」

「いいええ」

「マスター、優しいんだねえ…」

「へっ……そりゃどうも」

少しぬるくなったそれを私が飲み干す間、マスターは見るともなく私を眺めながら、ぼんやり紫煙をくゆらせて。

「はああああ……ごちそうさまでございました
大変美味しゅうゴザイマシタ」

「ハイ、お粗末様 で、もう落ち着いたか？
見る腹あ決まった？」

「見る腹って？」

「半獣 見に来たんだろ？」

「えっ！？ だって……アレ、冗談じゃ」

「……そう思ってたっだろ？」

にいつ、と、マスターは不敵に口角を上げる。

あ…マスターの目……？

「特別に見せてやるよ、その勇気に免じてな？」

つかつかと窓際に歩み寄り、閉めたカーテンに手をかけながら、私を振り向いて。

やっぱり…マスターの目、赤くなって……。

—シャ、ツ

「！わ……！！」

「狼の獣化は満月の夜、それも今夜は星さえ見えない……お前、ラッキーだぞ……！」

開いたカーテンの向こうには、まるで落ちて来たみたいに窓いっぱい、真っ白な真ん丸お月様。

柔らかに澄み切った光を背中に受けながら、マスターは瞳を赤く煌めかせる。

「く……っ！　が、あ……！！！」

見る間にマスターの全身は毛に覆われ、鼻先がぐうっと伸びていく。口が大きく左右に裂けて、犬歯が大きく長く、鋭くなる。

時折ごき、ぼき、と骨が鳴って、急速に盛り上がる筋肉や骨格について行けない衣服がじりじり破れていって。

四つん這いになった床が、先端の尖ったカギ爪に引っ搔かれてガリガリと音を立てて。

その変身が完全に終わったとき、私の目の前にいたのは。

「グルル……」

お伽話やライトノベルなんかに出て来る描写、そのまんまの姿の。

「あ……ああ、嘘………」

狼男だった。

「や…嘘、マスター……！」

目の前の光景が信じられない。
恐怖に身体が竦む。

赤い瞳の狼男が、まばゆい月光の下、飢えたように私を睨み付けている。

鼻に皺を寄せて剥き出しにした、長く鋭い牙が光る。

この張り詰めた空気の意味が、わかりたくないのにわかってしまう。
獣ははかっているのだ。

私に飛び掛かるタイミングを。

「グル……ウウ………！」

「や……やめて………」

そしてその獣の身体は、まるで月明かりに溶けるように、砂みたいに崩れて。

「ツか、はああ………っ」

さらさら消える獣の顔の下からは、苦悶の表情を浮かべる人間のそれが。

「…え………!？」

いびつにシャツを盛り上げ、裂け目からはみ出していた毛や筋肉も、みるみる風化するよう崩れていつて。

「は、ああああ………っ」

後に残ったのは、あちこちがびりびりに破れた、もはやシャツとは言えないようなものを纏った、男の人。
詰めていた息をやっと吐き出し、荒く息をしながら、彼は傍に置いてあった椅子に力なく座る。

「はあ………っはあ………っ、はああ………っ」

「……………」

「くく…………っ、おま、口開いてる」

「ま…………マスター、なの？」

「はは…………っ、ビビっ、たろ？」

はぁあっ、くっそ……………」

あ、悪い、ちょ…水、くれるか…………？」

未だ苦しげな呼吸の下からの頼みに、私は慌ててカウンターの内側に回り込み、グラスに水を汲んだ。

視界の端で、傍の丸椅子にカーディガンが置かれているのを捉え、それも一緒に持って行く。

背もたれに身体を預けて私の手渡したグラスを呷る間に、それを肩にかけた。

「は…………あ？　　あぁ、すまん」

「あ、の…………大丈夫？」

「あぁ…………」

一番キツいところはもう通り越した
これが月イチ、満月の夜は毎回だ
……………ったく、やってらんねえだろ？」

マスターはまたひとつ大きなため息をついて、床に転がっていた煙草のケースを拾う。

中におさめていたライターと、煙草も一本引っ張り出して、カチ、と火を点ける。

「あ、の……マスター、って……」

「ん、そーゆーこと

自分が半獣じゃあな、そのへんの怪談話なんざ屁でもねってわけ」

「は……ははははは半、獣………！」

「……っ……（こ、こあいよお………っ）」

「ああ？ 大丈夫、んなビビんなくて
別に捕って喰いやしねえよ」

「……っ、（ママ私もうダメ………）」

「大丈夫だっつってんのに………あーもうがねえなあ……
おら、こっち向け」

「ヒっ、ひえええっ！

あた、あたしっ、食べたって美味しくな………っっ」

「ヒト喰う趣味あ無えっつの
一発手合わせ願うにしてもお前じゃ無理だろーが……だっ、ちーが
ーうって
逃げんなホラ、こっち向いてみって」

「ヒィ~~~~!!
せめて最期の晚餐にケン○ツキー食べたかったあ~~~~ああ
ああっ!!!?」

煙る煙草をくわえたまま、背を向けている私の身体をくるんと返す。
恐怖に何が何だか訳がわからなくなっている私は、意味不明な事を
叫びながらもされるがまま。

そのブレる視界に、この状況にそぐわない、何ともファンシーなモ
ノが。

「……ホレ耳見て、耳」

「は………」

キラキラのマスターの銀髪は、いつもちょっと長めだから、私はマ
スターの耳を見たことがない。
でも、こういう感じのヒトだから、ピアスのひとつやふたつくらい
あるだろな、なんて、何となく思ってた。

初めて見るマスターの耳は、毛むくじゃら。

三角形で、ふわふわの毛に覆われていて、頭頂部の左右の端から飛び出している。

これはその……あの、世に言う……。

い、『イヌ耳』ですかっ???

「え……っ、ええっ!?

ナニこれっ、どーなッてんのっ?!?!?」

「な? 怖かねえだろ?

……いて! んな引っ張んな」

「……? ……?? はあ……」

もはや茫然とするしかない私に、マスターは背伸びしながら立ち上がり、くるっと後ろを向く。

そんなに破れてねえな、と、お尻のあたりを確認した後見せたのは。

「ほれ、尻尾ですよー……っとはい、フリフリ……ってな」

「し、し、し、しっぱ………」

「な？ 怖かねえだろ？」

あんな物騒なナリになるのは、ほんの一瞬
心配しなくても、何もしやしねえよ

……その分、俺が死にそうな思いすっけどな」

あーしんど、と、マスターはまたどっかり椅子に腰をおろして、
グラスに残った水を飲み干す。
短くなった煙草を灰皿に押し付けて消して、新しい一本にまた火を
点けて。

「苦しい、の……？」

「あん？」

「その……変身、するのって」

「ん……まあな 見てたろ？」

一瞬とは言え、身体の構造が組み変わるんだ
苦痛も、それ相応ってところ」

「あの……どんな感じ？」

「あー……？ そうだな………」

自分の腹ん中に手え突っ込まれて、内臓ぐちゃぐちゃにかきまぜら
れる……みたいなの？

はは……何でお前がそんなイタそうな顔してんだ」

「……」

「ま、そりゃ慣れるまで時間あかったな
ガキン時やもう毎回泣きわめいてたっけ……」

ぷはっ、と煙を吐く息遣いがまだ辛そうなマスター。
疲れ切ったように片手で顔を拭って、きつく目をしばたたかせる。

「ホントに……大丈夫？」

「あ？ 気にすんなって、平気ヘーキ」

「だってすごく辛そうだよ？」

あ、お水もう少しいる？ 私持って来るよ？」

「だーいじょーぶだって

言ったら、コレあ月イチの恒例行事なの」

「でも……だって……」

「はは……お前、優しい嬢ちゃんだな」

依然心配そうな声音と表情の私の頭をくしゃつと撫でて、マスター
は柔らかに笑い声を立てた。

「ほれ、お前も座れ」

「あ、うん」

「ほら見てみ、いい月だろ？」

「うん、ホントだ……ああ綺麗だねえ」

「な？ 月見は割に好きなんだけどよ……ホントに、はあ……」

これで獣化さえないけりやあな、と台詞が続きそうな雰囲気、私は
気になっていた事を尋ねることにした。

「……ね」

「ああ？」

「何で私に、見に来いなんて言ったの？」

「……そんな気分になったから？」

「そんな気分で……どんな気分よ？」

「……『まあ、いっか』的な？」

「そんな……疑ったりとかしなかったの！？」
私、アカの他人だよ！？」

何するかわかんないじゃん！！」

「それ以前にだ、俺あまず来るとは思わなかった」

面白えヤツだよな、お前、と、マスターはまた笑う。

月明かりだけしかない薄暗い店内に、その声は今まで聞いたことがないくらいに、低く心地よく、優しく響いた。

「……ヒナコ」

「んあ？」

「私の名前は『矢井田ヒナコ』

『お前』でも『嬢ちゃん』でもないよ」

「ふん、ヒナコか……ぴったりな名前じゃねえの
ヒヨコみたいにピーチクパーチクってか？」

「な……！　っ、意地悪っ」

「ははは……」

「バカ、もお笑うなっ………」

むくれて座ったまま身体を背けた私の頭を、やっぱり椅子に腰掛け
たままのマスターがまたぽんぽんと撫でた。

—……？　なんだ、アレ

視線の先、マスターの影。

座ったお尻の辺りで、何かが左右に揺れている。

—……ああ

そおっと視線をずらして確認してみる。

その揺れる影の正体は、ご機嫌そうにパタパタしている尻尾。

マスターの様子はと言えば、少し楽になったのか、さっきより寛いだ様子で、相変わらず私の頭をぽんぽんしている。

—なんか、犬みたい……

沸き上がる、不謹慎な好奇心。

「ねえマスター」

「んん？」

「マスターってさあ……その……狼、なんだよね？」

「あ、守護獣か？」

「そうだ、俺の守護獣は狼だ」

「……本当？」

「本当？って……お前だって今見てたろ」

「うん、そうなんだけど……」

「なんつかさあ……似てる気がしてねえ……」

「似てるって、何に……」

「言っとくけどな、俺あ犬じゃねえぞ」

「断じて！ 絶対！！ 犬なんかじゃあねーかんなっつー！！」

「ふうん、そっかあ……犬じゃないんだあ……」

私の目論見を動物的直感で察知したマスター。

些か震えた足取りで椅子から転げ落ち、窓際の壁に後ずさり。

私も立ち上がって、逃げるマスターの後を追う。

ぶしつけな私の好奇心は、きっと顔に出ているに違いない。

だって、私なんかにビビってるマスターの顔といい何といい、さっきから楽しくって仕方ないんだもん。

「ひ、ヒナコ……お前、い、今一体何考えてる………」

「ウフフ……ッ

マスター、とっくに気が付いてるんじゃないの……?」

「や、やめろ……やめるんだ………」

「フフ、ウフフッ……あははははっ………」

「やめろ……頼むそれだけはやめてくれ………!」

私はゆっくり、地べたにシリモチをつくマスターの前にしゃがみ込む。

片手の平を、前に差し出す。

やるべきか、やらざるべきか。

「マスター」

それが問題だ。

「……………お手」

「やめろ……頼むそれだけはやめてくれ………!」

地べたに尻餅をついて逃げまどう俺の前に、左右ふたつのみつ編みオサゲを揺らしながら、制服姿の小娘がしゃがみ込む。片手の平を、俺の目の前に差し出す。

「マスター」

ああやられる。
もう絶対やられる。

「……………お手」

「わう
……………っ!? てンめ……………!」

「おかわり」

「わおう

……………ッこんのヤロ!」

ヒナコの一言に、身体は条件反射並の素早さで応えた。

俺の意志とは関係なく、『お手』と聞けば右手が、『おかわり』と聞けば左手が反応。

ついでに情けない鳴き声まで。

ウケ狙いだあ？

バカ言ってくれんな！

—…ツ畜生………

誰に対してなのかもわからぬ敗北感にうなだれる俺をよそに、オサゲを振り回して大爆笑のヒナコ。

「はは……あはははは……っ！」

「お前……やっぱひでえ女………」

「ぷぷ……くくく……っ、ね、本当はマスター、いぬ………」

「犬じゃねええっ、狼だっ!!」

「は、ははは、だって、今『お手』した………」

「わう

!!………けっ、もう、好きに思いこみやがれってんだ」

「ぎやはははっ！ あはははは……っ」

「……ぬあゝー……っ！

こんな……っ月が威張ってなきゃあよおっ！」

がしがし頭を掻きむしる俺に、ヒヨコみたいな名前の小娘は笑いすぎでにじんだ涙を拭いつつ、機嫌よさげに話しかけてくる。

「は…あはは…でも不思議だねえ
変身はもう終わったんでしょ？」

「ケツ……アイツのせいだ、アイツ」

指差すものは、窓の向こう。

「ん？ 何、お月様？」

「今夜あすっげーいい月だろ？」

おら、満月が威張りくさって、星なんか見えやしねえ
こーゆー月夜にはな、獣化の名残が一日尾を引くんだ
……ホレ見ても」

顔の前に掲げ、漫画なら『にゅっ！』と擬音がつきそうな勢いで伸ばして見せる、左手の爪。
狼男に相応しく、一瞬で長く鋭くなるそれに、ヒヨコ…もといヒナ

コは目を丸くする。

「わぁ！　びっくりした…！」

あ、それでさっき、耳とか尻尾とか？」

「ん、そーゆーこと」

「あの……さっきの『お手』……」

「わう」

…だから……も、勘弁しろってマジで」

「あ、や、ゴメン、そういうつもりじゃなくて
その……ああいうのも、こんな月夜の影響？」

反射的に差し出してしまった右手を引っ込めながら、不本意丸出しの顔で首を縦に振る。

「……もう人間としての尊厳もクソもあったもんじゃねえっつの…」

「あ……その、ゴメン、ね？」

「ああ？」

「だからその……オモチャに、しっちゃってさ」

「……？　ほお？」

「何よ……悪かったな、って、反省してるんじゃない」

「ふ……っ、

やっぱりイイコだな、お前」

「ヒナコだってば」

「へいへい、ヒヨコちゃん」

「ヒナコ！」

「くっ、ははは……」

予想外に弾む会話が楽しい。

喋る間に短く燃えてしまった煙草を始末し、新しいものをつまむ。

「……まだ吸うの？」

「？ ああ、煙いか？」

「そうじゃなくて……」

あんまり吸うと、身体に悪いよ？」

子供じみた、咎めるようなそれではなく、ただただこちらを案じるような声音は、不思議な力を持っていて。

「……じゃ、今夜あこれで最後」

「うん……あと一本ね」

気付けば目の前のヒヨ……ヒナコに、そう返していた。

おかしなことだ。

獣化した夜は、一箱空けてもまだ足りないというのに。

「……ね」

「んん？」

「教えてよ……マスターの名前」

窓辺に寄り掛かって最後の一本を味わう俺に、ヒナコがまた聞いた。

「へへ……っ、食い下がるなあ」

アレか？ やあっぱお前、俺に気があんだろ、なあ？」

「だからさあ……それすごい気になってるんだけど」

何で『名前教えて』ってだけで、そういうコトになっちゃうかな？
マスターに名前聞いた女の人って、みーんな下心ある人ばっかだっ

たわけ？」

「はぁ？ ……………」

「……何この沈黙

あつ、さては図星かあ？

イヤーン、オトナってフケツうー」

わざとらしい言い方で咎めたような形にしながらも彼女は、そりや
そうだよ、大人だもんなあ、と、淡く柔らかな理解を示した。

実際、ヒナコの指摘はその通りで。

名を聞かれることと、爛れた欲望を含んだ、媚びた視線を寄越され
ることは、いつも同じことを意味していた。

一彼女なら、この名をどんな風に呼ぶだろう。

「……………史惟」

「……………ん？」

「黒沢史惟
くろさわしのぶ

……………俺の面前だ」

疑問が形をなす頃には、俺の口は勝手に、ヒナコに名前を告げていた。

「しのぶ……っていうんだ…

ね、漢字ではどう書くの？

やっぱ忍者の『忍』で『しのぶ』？」

問いかけには口で答えず、かわりに後ろの窓ガラスに。結露にほんのり曇るそれに、指先をすべらせる。

黒

沢

史

惟

「へえ…それで『しのぶ』って読むんだあ……」

くわえ煙草で名前を書いて振り向いては、『お分かり？』とばかりの表情にて、わかったかどうかを確認。

字面を目にしての感想には、頷いて相槌。

するとヒナコはつつ、と俺の隣に歩み寄り、聞きもしないのに自分の名前を窓ガラスに書き始めた。

ムリに背伸びをして俺の名前の隣に書こうとするから、少なからず字がゆがむ。

判読したところによると、どうやら彼女の名は『矢井田ヒナコ』と書くらしい。

「あーう……なんかヘタになっちゃった
しのぶちゃん、字、綺麗だねえ」

「一応書道五段」

「……？ それって上手いの？」

「ま、それなりだ」

「ふうん………」

「ねえ歳は？ 今いくつ？」

「再来月で28」

「あら、思ったより若い
てつきり三十路オーバーかと」

「なんだよ、見る目ねえな」

「むう！　じゃあしのぶちゃん、私の歳わかるわけ？」

「……ちょっと待て

さっきから何なんだ、その『しのぶちゃん』ってのは」

「だって、下の名前『しのぶ』なんでしょ？
何かおかしい？」

「おか……っあー！も面倒臭え、好きにしろ」

「で？　私いくつかわかる？」

「どうせ17、8くれえだろ？」

「……ぬう、当たり　今高校2年」

「おーおーセイシュンだねえヒヨコちゃん」

「ヒナコ！　もうっ、しのぶちゃんの意地悪っ」

「ははは……」

「……もうイヤ

いっつもみんなにそうやってからかわれる」

「……名前のことか？」

「お雛様のヒナコちゃんとか、ピヨコちゃんとか、矢井田だからヤイコとか」

「はは、イジられてんな

ま……それも親愛のカタチだろ」

「小学生の時から必ず！

かならずクラスに一人は名前ネタでつかかってくるヤツがいるのよ！

「それも男子！！」

「男心のわっかんねーヤツだな

好きなコにこそ、そーやってカラんだり、イジったり、つい意地悪したくなるってもんだろーが」

「そんな屈折した愛情、いらん！」

「く……っ、はははははっ」

大して吸わないうちに煙草はまた短くなってしまっていて、火も消えかけていた。

若干もったいなく思いながらも、「今夜最後の一本」を始末する。

それでもひどく、気分はよかった。

月の満ちる夜は好きだったが、心のどこかにはいつも、言い知れぬ寂寥と虚無が巣くっていた。

月光の照るこの窓辺で悶え苦しみながら、孤独さに付き纏う、どうしようもない淋しさを持て余していたから。

浅い『オトナ』の付き合いでそういうものをごまかして、自分が半獣であることをバラせる、親密な誰かがいるヤツの幸福をバカにして。

そのくせ、そういうヤツらをとてゝ羨んで、同じくらいに妬んで。

いつの間にか胸の内に凝り固まっていた荒んだものが、ヒナコが一言喋るたび、緩やかに解けていくような気がする。

その崩壊は、奇妙なほどに心地良かったものだから。

「それにしても、何でそんなにこだわる？」

「ふえ？」

「名前

名前を呼んだり呼ばれたりってのに、随分こだわってるだろ？」

「そんなん当たり前だよ！」

だから、俺の心は奪われたのかもしれない。

「名前を呼び合うのは、お友達になる第一歩でしょ？」

屈託なく笑いながら、当然のようにヒナコは言った。

可愛い笑みだった。

蕾が一気に綻ぶ様を見るようで、とても可憐で、愛らしいと思った。

健やかで、無垢で、澄み切っていて。

「大事なことだよ

仲良しになれる、はじまりだもん！」

およそ自分には、似つかわしくなくらいだと。

「……なるほど

理由あつてのこだわりな訳だ」

「そーよ！

お友達はこうやって増やさなくちゃ」

「へっ……さしずめ『友達100人できるかな』計画ってどこか？」

「んー…ま、そんなところ？」

あ、ねえしのぶちゃん」

「何だ」

「次に変身する時もさ、私ここにいてもいい？」

「あ？ ……何のために？」

「ん、えっと…それは……」

！ お水汲んで、着替え持って来てあげる！」

「そんなもん、先に用意しときゃいいだけの話だろ」

「うん……そ、だけど……」

「月イチでこーんな遅くまでぶらぶらしてちゃ、親御さん心配すつ
だろ

……ほら、もうこんな時間

ヒヨコちゃんは、とっととお家でおネンネだ」

「だって心配だよ！」

「余計な世話

大人の心配する前にてめーの心配しろ」

「ヤダ！ だって……だって来月になったら、しのぶちゃんまた一
人で変身するんでしょう？」

またひとりぼっちで、あんな苦しい思いするんでしょう！？」

いやに必死な様子で、ヒナコは言い募った。

後暗い含みのない、ひたすらにこちらを案じるばかりの言葉と声に、表情。

他人が自分に向けるそんな感情には、久しく触れていなくて。

そのうえヒナコの危惧が見事に的を射ているものだから、俺は瞬間、見透かされたのだと思った。

自分の心の底や、埋まらない空虚を。

これが他の誰かなら嫌悪するところだが、ヒナコになら知られてもいい気がした。

途端に、願いが湧いた。

「……つとにいいヤツな、お前」

「へ？」

一半獣なんかであるこの身を案じてくれる、優しい少女が。

「大丈夫 言ったら、もう慣れっこだって」

「でも……」

一次の獣化の夜も、傍にいてくれたなら。

「…ありがとな

気持ちには、受け取っとく」

「……………うん」

—この苦痛と寂寥は、どれほど癒されることだろう。

でもヒナコは、俺などが望むにはあまりに無垢だから、いつかきつと、酷く傷つけてしまうに違いないのだ。

純粹で優しい、あたたかな心も。

何者の手垢も知らぬ、しなやかな肢体も。

だから。

「さ…………学生ちゃんにはえらい遅い時間になっちゃったからな、家まで送ってやる」

「……………いいの？」

「俺サマの愛車、特別に乗せてやるよ

お前、外車なんて一生縁がないだろうからな？」

「がっ、外車持ってんの！？

三十路手前で外車なんか乗り回してんの！？

んまあ~~~~~」

「貴重な体験さしてやるんだから、感謝しろ？」

「あんま車興味ないんだけど……わ、わ！
なんでもないです！

ありがた〜く乗せていただきますですハイ」

「ははは……ああ、そうそう

おい……ヒナ」

「……………えっ？」

初めて使った呼び方に、驚いて視線を合わせてきたヒナコ。

見るからに柔らかそうな色の唇に、右手の人差し指を乗せる。

心許ないほどに甘い感触を感じながら、意識を掴む。

赤の狼の瞳は、強い暗示や催眠の力を持っている。

すぐさまヒナコの瞳は、操り人形のそれのように、茫洋と焦点を失った。

「お前はその後、俺が『おやすみ』と言った途端に眠くなる」

「……」

「眠気に逆らわなくていいから、そのまま眠ってしまうんだ、いいな？」

虚ろな瞳のまま、ヒナコが頷く。

「そうして……今夜ここであつたことはすべて、目が醒めるまでに忘れてしまうこと
お前の眠気は、俺が『起きろ』と言えば覚めるから」

「……」

「……わかったな？」

「………や、あ」

「！」

催眠にかかっているというのに、ヒナコは首を横に振った。
抗いきれないことをわかっているのか、悲しげに目を閉じる。

「いや……わす……た、くない……」

「……ヒナ」

困惑するうちに、バランスを崩したヒナコが倒れ込む。
慌てて支えた身体は、驚くほど軽くて。

「……っ」

何をそんなに忘れてたくないのか、それはわからない。
ただ、少なくとも俺に関わることであることだけは間違いなくて、
ヒナコはそれを記憶から取りこぼしてしまわぬよう、必死になって
いて。

「ヒナ……いいんだ

今夜のことは、みんな忘れてしまってくれ」

一でないと、俺は。

「や……いや、あ………」

「…………『おやすみ』」

かくん、と膝がくずおれて、ヒナコの意識は闇に沈んだ。
施術は何とかうまくいったようで、間もなく規則的な呼吸が聞こえ
てくる。

「……忘れてくれていい」

人差し指で確かめた無垢な女の唇は、自分のそれで触れてもやはり、心許ないほどに柔らかく、そして甘やかだった。

「……ん……んんう、によ？」

「……………『によ？』って何だ、『によ？』って」

「はえ？ マスター？」

あれ、ここ……んん……？？」

私はあたりを見回してみる。

何だか頭はふあふあしたまんま。

でもどうやらここは、マスターのお店みたい。

座っているのは……あ、いつもの席。

「あれえ……私いつお店に来たんだっけ……？」

「へ……っ、あの程度のアルコールでダウンたあ、やっぱお前ネン

「ネちゃんだな」

「へぁ？ アルコール？」

ひよいとマスターが持ち上げるのは、私の目の前に置いてあった空のマグカップ。

どうやら、ココアか何かご馳走になったみたい。

「寒かったからちいゝとばかりリキュール垂らしただけだったのに……」

「まーすやすやよく眠ること！」

「あら……すびばせ」

「一応な、うち夜はバーだから？」

「知ってるよう！」

もう、マスターの意地悪っ」

「ははは………」

「一でも私、いつここに………そうだ、前にマスターが『半獣』が何とかって……」

「あーそうだっ！」

「ねえマスター、それで『半獣』ってのはどこにいの！？」

約束したよね、本物に会わせてくれるって！」

「……………ああ？」

「もう！ とぼけちゃってえ！

私ちゃんと覚えてるんだから！」

「あのな……肝心なところ忘れてるっつの」

「ふえ…？」

「だから…あれは俺の悪ふざけだった、ワビに一杯奢るつつってソレ出したんじゃねーか

美味しい美味いって大騒ぎして、しまいに俺の分までブン取ってよ
お」

「ほえ……なあんだ、そっかあ…」

「考えてみる、実際半獣なんかに会ったりしたら、お前びびって固まっちまうだろ」

「あー……ま、確かに……………」

「な？ 頼むからそんな氣い落とすなって

俺が悪かった

学生チャンにはえらい遅い時間になっちまったし、家まで送るわ」

「……………いいの？」

「俺サマの愛車、特別に乗せてやる

お前外車なんて一生縁がないだろうからな？」

「がっ、外車持ってんの!？」

「しがないサテンのマスターの分際で外車なんか乗り回してんの!？
んまあ~~~~~……」

「……何か今サラッとひでえ事言われたような……まあいい
貴重な体験させてやるんだから、感謝しろ？」

「あんま車興味ないんだけど……わ、わ!
なんでもないです！」

「ありがた〜く乗せていただきますですハイ」

「あれ……？」

「ちょっと待って……」

「ん……？ 何だ、どうした？」

「なんかこんな会話、したことあるような気が……」

「……………はあ？」

「いつだろ……」

「やだ全っ然思い出せない」

「……気のせいだろ」

「ううん……絶対そんなことない
今とそっくりな会話、絶対どっかでしてゐるって……
あゝんも何この感じ！ キモチ悪く……」

「んな気にすんなって
こういう時のために、世の中に『デジャヴ』って言葉があるじゃ
ねえか、な？」

「うむくくん………」

「何だろ……私、すごく大事な事忘れてる………」

スツールに座ったまま頭をぐりぐりやる私をよそに、マスターは私の
相手をしながら、すっかり準備を整える。

ガスの元栓を閉め。
ジャケットを羽織り。
店の鍵と車のキーを取り出して。

「おら、置いてくぞ」

気がつけば出入口のドアを開けている。
本当に置いて行かれそうな様子に、私は慌てて声をかけた。

「あゝしのぶちゃん待って待って！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8726g/>

しのぶちゃんと私

2010年10月8日13時24分発行